幻想魔蝶 異端録 -魔蝶の女-

ALFRED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想魔蝶　異端録　－魔蝶の女－

【Ｎコード】

Ｎ００１２Ｄ

【作者名】

ＡＬＦＲＥＤ

【あらすじ】

彼女は、Ａｓｒｉｅｌと呼ばれていた。受胎告知を告げる、生命の担い手たる告知天使アズリエル。裁きの審判を下し、生者を黄泉へと誘う、告死天使アズラエル。そのどちらがどちらでもあり、あらず存在。第一級、災害指定魔族。Ａｓｒｉｅｌ私は彼女に奪われたモノを取り戻すべく、この手記を書き綴ろう――歴史魔導師ザックス・バーンフレア。――――注釈――――この手記を書いた師、バーンフレア導師も、やはりＡｓｒｉｅｌの手に掛かり落命されている。私たちはこの手記を手がかりに、かの魔物Ａｓｒｉｅｌの生

態と実体を明らかにし、改めて人の世の制定の礎としていくことを
ここに誓う。

Ａｌｉｃｅ『物語の前』（前書き）

初めまして、電子の地平を漂う皆様。

当物語は、歴史と記憶、そして記録を辿って繋ぎ合わされていく、ちぐはぐな物語構成となっております。

もっとも、私はＡｓｒｉｅｌと呼ばれる彼女について、真実を知ってはおりますが、それでは物語の楽しみがございませんので、あしからず。

物語の形式、ジャンルなどですが、実は区別すらありません。だって、人の人生に命題をつけるなんておこがましいじゃないですか？　そうでしょう？

それでは、この享楽と戯言にお付き合いできるお方だけ、どうぞ――彼女が人間なのか、天使なのか？　それとも、単なる魔物なのか？

そんなこと、どうだっていいんですけどね……

そうそう、これは絶対に大切。

小説を読むときは、明るい場所で、眼に優しい環境で読んでくださいね。

それでは――失礼します。

Ａｌｉｃｅ『物語の前』

【Ａｌｉｃｅ】

……何をやっているんだか、私は。

――これは、夢だ。

――そうだなぁ、夢、だよなぁ。

――そうだ、兄上。貴方が私の前に現れられる筈がない。

――兄上？　……アレ、俺、お兄ちゃん？

――他に、誰が？

――……嗚呼～、お袋（ふくろ）はもう絶縁っつか生死不明だし。
っつか姉貴はいるが、妹なんて話、初めてなんだが……親父は以下同文。
いや、例え血が繋がっている程度では、俺は『妹』とは呼ばないぜ？

――……では、『陰（かげ）』とでも……

――決定、なんだい僕の妹――って何で生れ落ちちまったんだ畜生！　何ヘマした俺！

――……やはり、貴方でも理解してくれないか？

――はい？　何が？

――私の、存在理ゆ……

――ハッ、また思春期の若人（わこうど）全開なお悩みで……んなもん簡単じゃん。自分で見つける、これに限る。

――……自分で

――俺の体験談を逐一（ちくいち）語ったって、……まぁ俺の妹だったらだいぶ理解してくれんだろけど、所詮他人の物語。
自分に降りかかるなんて保障はねぇ。どう足掻いたって、参考は参考。
手っ取り早いのは自分で探して、自分で手に入れる。これに限る。
まぁ、その式だと自分で考え出したと言う自信ができて、中々思考回路を作り直しにくいんだが……
鬱気味の妹（おまえ）にゃそれぐらいが丁度いいだろう。

――……貴方みたいに、活発にはなれない。

――なれるさ。人間、いや、俺たちは何にでもなれるんだぜ。
空を飛びたきゃ鳥になれ、
大地を踏みしめたかったら人であれ、
海を渡りたければ魚に……
人間ってのは有能で万能で全能であり……故に無能で無能で無能である。
ハッ――ゼロはどんだけプラスしたってゼロ？　違うね。人間は数式じゃない、無限式よ。
俺になりたければ――『俺を超えろ』――

――……無理だ。

――無理とは、『【理】(ことわり)【無】(なし)』と書く。
違うね、理由はあるさ、理屈はあるさ、手順も、順路も、手段も、無限式にな。
その台詞はここで使うべきだ。それにこそ『理由は無い』、ただ『有る』のみ

――貴方は、強すぎる。そんなことを堂々と諳んじている時点で、貴方そのものが無限式で、無意味だ。

――違うね、俺こそ世界で最弱さ。最低最弱の弱虫毛虫だから、逃げ出して、最強って殻に逃げ込んだ。
妹(いもうと)よ――お前はどうだい？

――ならば、私も弱々しい翼が欲しい。女々しい羽根が欲しい。悩める心と、葛藤する苦悩――私は――

『私は、私が怖い――』

――ならば、望めよ。妹――お前は、良い女になるぜ

――目が覚めた。
「……変な、夢」
まるで、鏡向こうと話していた気分。

……でも、
「ちょっと無くなったかな。イタイの」
羽根（つばさ）……うんと伸ばす。
……なんか、気分がいい。
アレは……
あの人は……

鏡の向こうであるが故、
それは私の一つの形。
ゆえに、私。

不思議の国であろうと、鏡の国に迷い込もうとも、それは私。
きっと、私と同じ、悩んでいる。
いや、鏡対象で「あべこべ」に成るのだから、私のことなど、もう露のように忘れてしまったのだろうか？

ならば、その反転である私は、貴方を覚えていよう――
貴方に出逢ったそのとき、
もし、忘れていたのなら――

鏡の向こう側に翼を広げ――

貴方を――殺して差し上げましょう。
愛しています。永遠に――

名前　ルルダ　【邂逅時　そう名乗る】
通称　Ａｓ（アズラエル　アズリエル
年齢　御年　０歳（＋１９
容姿　黒髪黒瞳　漆黒の白衣（！？）に翼のようになびく髪。
属性　姉＝妹　長髪　少女　天使＝悪魔　戦乙女＝首無騎士
特徴　戦場　処刑場　墓所などにふらりと現われてしまう。
Ａｓ「……好きで現れるわけじゃない」
実際は、聞こえない声に呼ばれて、本能で漂っていると言う。
能力　死者感知　月光蝶　斬技

「ヴァルファラ戦役の折に登場し、数多の兵士を敵味方関係なく葬った、最悪の天女。
蝶の羽根を羽ばたかせ、金色の燐粉を広めては、ひと羽ばたきで百名の騎士達が物言わぬ屍と化した。
これにより、第一級　最悪魔物の指定を受け、全世界に向けて警戒令を発布。
さらに同種として、
フレイ・ヴァンシーなる魔歌なる少女――
ブレイブヴァスターなる魔剣を操る娘を確認。
どちらも、第一級魔物に認定し、対策を講じている」
以上、ザックス・ヴァーンフレア師による、ブルムヘル調停紙から抜粋。

のちに、ヴァーンフレア師は先のヨッツンヘイム魔殿の戦役にて、
かのアズリエルに葬られ、
爾来、彼女たちの姿は誰も見ていない。
アルフレッド・ヴァーンフレア…

「……変な夢を見た」
「そうですか。どんな夢です？」
「女の子が出てくるんだ。俺にそっくり、いや、どっちかっていうと、実妹（いもうと）にかな。
ナミの黒い版」
「ナル姉さんは元から黒いじゃないですか。お腹も」
「上手いこと言うな。いや、でもアッチは垢抜けてと言うか、スパッとしたような、何かこう……空気みたいな、スカッとした感じがあるじゃん。
肉親の復讐をあっさり諦める、みたいな。
あぁいうのは、【蒼さ】な気がするんだ」
「青さ……」
「いや、未熟の青じゃなくて、【蒼さ】
――蒼穹（空）のように、懐が深く大らか過ぎて、誰も掴めない深遠みたいな、
でも【大らか】なんだ。
だが【黒さ】ってのは、アレだ。今言った、深海の奥底のような、堕ちる様な、【深遠】なんだよ」
「黒、深遠？」
「黒はすべての色を混ぜた、なんて台詞があるが、ありゃ間違いだ。
黒は『光色』の前では、かすんで灰になって、はいさようならだ。
黒の真の意味は、【無変】――何も変わらず、何も起こらず、ただ【停止】を意味するだけだ。
その黒に触れると、飲み込まれると言うよりは【感染（うつ）】るんだ」
「うつる？」
「黒ってのは正負あれど、強大な力だからね。
……不思議の国のアリスってさ、アレ、見方によっちゃ、それだよね」

「アリスが？」
「だって、俺デズニー版が印象深いンだけど、女王に喧嘩売って、キノコ食って大きくなるだろう？
その辺――黒いぜ。少女の腹黒さというよりは、正義感から反転した、黒さって所か」
「兄さん、アリス嫌いなんですか？」
「いいや、大好きさ。俺、腹黒い女の子は好みだ。大抵、頭がいいから」
「そっちが理由ですか」
「純粋な子だって嫌いじゃない。そんな娘はたいてい、優しすぎる。
完全に純粋無垢で無邪気ってのは、普通に最悪なんだけどな」
「最悪なんですか」
「嗚呼、自分の過ちに気付かないし、下手をすると周囲も気付かない。いや気付けない。
でも着実に小さな世界を滅ぼしていく……
また話それたが、夢の中の娘は、そんな感じ――まさしく、アリスだった」
「アリス、金髪だったんですか？」
「いいや、翼が金色の燐粉してた。髪は黒――ハッ、翼は俺と対照的で『蝶の羽根』だったがな」
「……アレ？　たしか――」
「そう、天使の翼は基本は、鳥類――羽根、羽毛で覆われたアレだが、あの娘のは『翅』だった」
「……兄さん、何ぼ～っと？」
「いや、【翼】ってのは自由とか飛行とか――そう言う意味を持つけど、
裏意味には【逃避（とうひ）】ってのがあるんだ。何かから抜け出したい、投げ捨てたい欲求。
過去の俺はそれそのものだったんだけど――蝶の翼ってのは、何を意味してンだろうなぁ」

Alice & Alice

Till two Alice meets……She will play the chief character……Am irror

Ａｌｉｃｅ『物語の前』（後書き）

Ａｓ「……はじめまして（ぺこり」
ＡＬＦ「初めまして、作者です（ぺこり」
Ａｓ「猫被ってますね」
ＡＬＦ「第一印象が大切なんだ！　しなりしなり（くねくね」
Ａｓ「気持ち悪いです。えっと――」
ＡＬＦ「はい、友人に誘われて、入ったはいいけど、そっから何か出さないとなぁ～って、書いて」
Ａｓ「書置きされていた本編を、一部改変してお送りいたしております。
ジャンルは完全にファンタジーかつ、初めは精神モノから始めさせていただきます」
ＡＬＦ「さって、実は作者本人も、Ａｓｒｉｅｌの裏設定とか、能力といったのは結構、手練手管裏撃ってあるんですが、先考えてねぇ」
Ａｓ「……酷い」
ＡＬＦ「いや、主人公な君描くより、俺は『人間』を描きたいんだ。このファンタジー世界で、君と言う存在を中心に、様々な人間が現れるんだ。
世界最強の少女とか、腕と希望を無くした騎士、父親を探す無垢な少女に、教会騎士と愉快な仲間たち――
テーマは、【悪】って何？」
Ａｓ「……悪」
ＡＬＦ「そう、【悪】。正義にしても良かったんだが、それは君の兄貴に任す」
Ａｓ「……兄さん」
ＡＬＦ「ある意味あれが、【最悪】なんだけど……まぁ、そこまで進めたら御の字ってことで。

それでは！　座右の銘は【皆愛してる！】　ＡＬＦでした！！」
Ａｓ「座右の銘、彼岸花の根っこ」
ＡＬＦ「毒毒！　そこ毒！？」（フェードアウト

一人目　【粛清者】

『1st　Selefies』

――そは天使にして女神に澪尽くしたる死神（パーシアス）――
――女神に見初められし血に続く　敬虔なる猟犬（パシアス ハウンド）――
――与えられた苦行を、苦痛を、試練を幾たびも超える　神の御子（パーシアス ジニア）――
――血に流るるは始まりなる男神の血なれど、魂に流るるは紛れも無き　女神の天使血（パシアス）――
――女神に叛きし者どもを、
粛清（パーシアス）し、
静粛（パーシアス）し、
断罪（パーシアス）し、
代行（パーシアス）し――
――そは天使にして女神に澪尽くしたる死神――
女神の騎士（パーシアス）なり――

――キィ――

かつての栄華は何処にも無かった。
ただ、返り咲いた紅い花が広がっていた――
貪欲なまでに、紅く――一面に広がっている。

……広がって、いく。

寂れた街、辺境の地域に属する小さな街の、灰暗(ほのぐら)い教会――
訪れたのは、白衣の騎士団――
その装いは騎士と言うよりは、法衣に近い。
最小限、急所を守る防具に、衣装を凝らした法衣で皮膚を覆った――魔法衣。
騎士団には普及していない、身軽なその装備。意味するのは即ち神殿騎士(ディバインツ)。

扉は開いていた――紅く。
そして、扉の奥で――

いくつもの、花が咲いていた。

頭蓋が開き、頭皮の花弁が花開き、赤い水を滴らせ――世界は、真っ赤に染まって――
中央は蒼かった。
呻き声、それは神殿騎士団の中からで、年若い青年が口元を多い咽る。
その死者の花弁から放たれる萌芽の香りは、明らかに、異質、異端、異常、――生きていない証。

「……下がっていろ」

赤の世界を侵蝕する――白。
同じ法衣を纏いながら、その佇まいは――小さかった。
神殿騎士団の中で、その人物はもっとも、幼かった。

幼さ過ぎた。年若い、では済まない。先ほど吐瀉した青年もまだ十代を終えた年代であろう。
中央から――騎士団を総統する位置から、緩慢な歩みで現れたの

は、本当に少年と言える年端ない少年であった。

紅色の世界で、青色が――唯一、血に染まらず、佇む影が――花を投げた。

実際には髪の毛（花弁）がまだ張り付いた――

少年は、かわす。まるでダンスのステップのように、しかし足は一歩も引かず、出さず。頭部に目掛け投げられたそれは、目標を失い、背後で備えていた騎士の一人に辺り――呻き声から悶絶、そして何を投げつけられたか理解し、小さな悲鳴に変わる。

彼らは――言ってしまえば、この手の作業は、仕事は、茶飯事である。にも拘らず、騎士団は、少年を先頭にし動けずにいる。

それこそが、異常。例えどんなプロが、プロとして、プロの仕事をこなしていても、それはやがて『日常』となる。

これこそが、異常。その日常を逸脱した、超越した、卓越した――事象が、目の前に、ある。

何をどうやったら、人の体がここまで壊せるのだろう？

描写はいるまい――騎士団は慣れてはいようと、これ以上の死者への愚弄は避けるべきだろう。

……せいぜい告げられるとしては、投げられたそれは、まだ小さな女の子のそれだったと言うべきか。

蒼い影が、また投げる。

――首だけを動かす――それは実際には首筋の筋肉を一杯に伸ばし、次に縮めると言う、動作が二回かかる。首だけ動かして避けれ

ば、最小の力で動いているように見えるだろうが、実際は最大の力で、速く避けている無駄でしかない。

故に、少年――、彼は『全身で避ける』。それが、最小。

人間は腹、胸、頭――この三つを中心に線をおいて、立つ。もともと立つと言う動作でさえ、重力に逆らう、力がいるのだ。

少年の動きは――実に、緩慢である。まるで千鳥足のようだが、歩幅はしっかりと――蒼い影に向かっている。

小さな悲鳴。後ろで騎士団の一人が倒れ、何か吐き出した音がした。血だろう。

……人間をこれだけ解体できる『力』だとしたら、たかが肉塊一つ、弾丸のごとき速さで打ち出せるだろう。実際そうだった。だから、避ける。緩慢な、流れで。

歩く――何か飛んでくる（軌道が見え、当たる箇所――可能（あて）られる）――後ろでもう、悲鳴はない。ようやくプロらしさが見えてきた。

歩く――こんどは胴体が飛んできた。（潰されるな……）――落下、衝撃。その前にすでに青年がいる。

体の軸、中心軸を中心に――流れるように、進むように、流す、避ける、緩みながら――進みは止まらず。

「……ギィ」

それは、人の形をしていた。
人の姿をして、人の着る衣服を着て、人の持つ瞳をもって、人の持つ腕だけが紅く染まっていた。

「禁じられた不死法……っか」
幼き体は弛まず、緩み――声音は凛然と、蒼を持つ者を射抜く。

「……一応、礼に習おう、聞えていたらな。蒼の地を統べる領主、教会に出頭願おう」
返答は無く、ただ紅い肉塊が投げ飛ばされる。鋭く、細く――それを流し目で見据えたまま、ゆるく、緩慢にかわす。

蒼の領主――驚くことに、この人物もまた年若い。まだ青年と差し支えない程の、線の細い若者である。
顔に特徴的な、領主としての刻印の刺青のほかは、貴族独特の色の深いガウン――が、紅い。
特徴的な蒼髪を彩る、深紅――

その瞳もまた紅く――青年の姿がその双眸に映り、

腕が現れた。

少年の動作が崩れる。緩慢が消え、緩みが失われ――疾風、鋭敏、風を切る素早さが生まれる。
顔面部に伸ばされた紅色の掌は、そのまま床に叩きつけられ、床をえぐる。木造とはいえ、それなりの造りはしている。その細身で砕けば、腕が折れるはずなのだが――

少年は、先の動きにも関わらず涼やかに、蒼と紅に塗れたの領主を見据え――
「声も聞えない。発症レヴェルはすでに5ですか。やれやれ」
また、現れる腕。

その軌道が見えない、その動きが見えない、その速度さえ量れない。
だが、「どこを狙うか」はわかる。
先ほどの惨状を見ればだいたいわかる。
周りの状況を見ればわかる――コイツは、「頭を砕いて」から、壊す。

現れる――大鎌。

まるで、虫の悲鳴――虫でなければ小動物の甲高い叫び、もしくは――奇声。
領主たる若者が後ろに飛びのき、失った腕を捜す。

腕は――少年の手の中に。もう片手には――蒼水晶で形作られた、巨大な刃を持つ、枝葉造りの大鎌、デスサイズ。

この世界には幾つかの魔術体系があるのだが、彼が用いるのはその、最上級　ハイエンドの一種。
魔法の典型とも言える、「無から有を生み出す」それである。もっとも、彼にはそのデスサイズしか描けないのだが――
「……では、神に祈りなさい。祈りの時間は短いですが」
蒼の領主は――次の瞬間、

すべてを投げた。

机、椅子、オルガン、死体の山、壁、床――蹴り砕き、抉り出し、それらを次々投擲し始める。

その残骸は奥に控えた神殿騎士団たちにも降りかかり、何人かが苦鳴をもらす。

少年はと言うと――また緩慢な動作で、しかも鎌はどこかに投げ捨てて、投擲物に当たって刃が折れた。

投げる、投げる、避ける、避ける――当たらなければ、無意味。

「キィ、……ザ、マ」

「なんだ、まだ喋れるじゃないか。じゃあ――」

蒼い髪が、揺れ消える――

蒼銀髪の髪が、やはり消える。

「祈れよ（プレイ ガッド）」

青年がいた場所、の真上――天井擦れ擦れまで飛び上がった、蒼い領主。

その真上――まさしく「首を刈る」位置、刃筋、鎌――

大鎌とは死神を連想させるそれであるが、実際はこのように「首を刈る」、あるいは「魂の尾」――肉体と魂を繋ぐ線を切断するために、「刈り取る」ことを目的とした得物であり、戦闘――このようなバトル物においては単なる「扱い勝手の悪い武器」でしかない。

そもそも刃が「内側」についているため「斬る」「突く」と言っ

た槍や刀のような技が限定されてしまう。大型武器になればなおさらである。

そう、なぜ天井でこういう状態になったかは、さておき――

何が言いたいかといえば、

この状態は、いわばスタンダート。模範的行動。

大鎌の正しい使い方。

首を刈る正しい位置。

ただの人間が、吸血鬼級の化け物を倒す、正攻法の戦い方。

ザンッ――ゴトッ

正しい行動に対して、正しい結果が訪れる。

「……な、何しやがったんだ？　セフィの野郎」
「上見てなかったの？　鎌で登ったんだよ。鎌で」
「はぁ？」
「キャッハ！　セフィーいつ見ても可愛いようぉ～」
「ミーハーは黙ってろ。って、鎌っていつ？」
「蒼の領主様が跳躍したとき。ほら、セラフィスの五能力の一つ」
「……ち、先読みか」

「だから、跳躍した領主の、残った肩に鎌をかけて、一回転して真上を取ったのさ――」
「ば、化け物かぁ！　あいつは！」
「だから、天使の座位を貰っているんだろう。
でも、凄いよな――殺傷力０の大鎌、魔族のみ刈る、神々のための死神、中々言うね」

そう、そして戦闘に向かないだけではない。
大鎌とは、対象を「固定」しなければ、刈れない。

肩に刃を立てても、「あまり切れない」ので真上を取れたのも、そのため。
擦過傷などは鋭いだろうが、それでも素人の刃物と変わらない。代わりにすらなれない。
通常刃物なら、「突き」で致命傷を与えられる。が、先に述べたとおり――
長刀や槍のように石突、柄の尻で骨を砕く達人も要るそうだが、それは長柄武器（ポールウェポン）独特の作りではあるが、青年――セラフィス＝フィルブライトのそれは、石突すらない。

……まるで、ただの飾りでしかない大きな鎌は、
紅ではなく、赤に染まっていた。
傍らに、小さな蝶が舞う。

「仕事、終わったよ」

憂鬱気味のセラフィスを、
「お疲れ様！」
「可愛かったよぉ！」
「違うだろう！　隊長、ご苦労様です」
「にゃっにゃん！」
「お怪我はないですか？」
「胸、さすりましょうか？」
「じゃ私おまむぐぅ！」
「ボスはまだ未成年だっつの」
「僕は１９だよ」
ちなみに、彼らの所属国、ガルフォニア聖典帝国では十分成人である。

「では、隊長――いかがいたします？」
中でも随一の体格――セラフィスよりかなり上背のある、騎士と言うよりは軍人に近い、それを法衣鎧で無理矢理沈めたような男が代表して問う。

「任務は終わったよ。吸血鬼じゃないし、首を落とせばさすがに――」
と、振り向きかけて、彼は騎士団に向き直ると。
「撤収――帝都へ帰還して、報告だ。もっとも蒼き領地の主は、第五神殿騎士団が殲滅したと」
『了解！』
足並みの揃った、号令一つ。

「では、飲みに行きましょう！　隊長！」
「阿呆！　これから社会勉強だ！　隊長、そろそろいいお年ごろぶらぁ！」
「駄目ぇ～！　隊長はこれから私がおぉんもちかえりぃ～～～！」

「あのなぁ、……お前ら、この土地の何処で遊び倒そうって言うんだ？」
体格の良い騎士が、苦々しそうに――告げる。

「この街、全滅しちまったのに――」

「ん？　廃屋で一日中抱っこ」
『シリアスなシーンぶち壊しだぁぁぁぁぁ！』
「誰だ！　こんな痴女キャラ騎士団にぶっこみやがったの！　本当にありがとう！」
「誰か、こいつここに一緒に沈めろ！　そこの馬鹿女も一緒に！」
「シャットを騎士団に入れたのは、デューク親父だよ」
『あのエロ爺最高！』
「お前ら、全員、さっさと帰れ。全員、ここに静めるぞ」
さすがの体格の良い騎士も、拳がわなわな震えている。

「まぁまぁ、ローラント。良いじゃないか、正直、ちょっとそっちの方が楽だよ」
と、足元を見据える。

未だ、乾くことのない紅の色――
何十と、数に入れられない形にまで果てたものも含め――

セラフィスは、瞳を閉じる。
「……僕は、俺は神なんて信じてないけど、祈るよ。
祈るのは神になんかじゃない。だけど他人にでもない。それは自分自身に祈り、そして信じろ。
僕たちでは助けられませんでした。でも、新たな生があるなら、

新たなる先で。
虚空の世界であるなら、その冥福を、僕は祈る。僕に祈る――」

蝶は――ただ小さく羽ばたいて、
蒼き者の瞳の前で、佇む。
「さぁ、本当に撤収だ。後は葬送班（牧師）の仕事だよ」
教会直属神殿騎士団第五部隊隊長、セラフィス。
彼は、そう言う男であった。

二人目『薄幸の少女』

『2nd　An　unfortunate　girl』

――僕は、何をやっても駄目だった――
――其レは、血色に染まった夜――

――腕を無くした男は命を無くし――
――生きる意味のない男は腕を亡くし――
――父親をなくした少女は担い手を失くし――
――そして僕は、はじめから何も無かった――

――彼女は、白があった――
――僕には黒さえない――
――望みも無く、意思も無く、想いさえ自分の物か、さだかじゃない――
――だから、何をしたって、駄目なんだ――
――何も上手くいかない――
――僕は、何をやっても駄目だった――

「……だから、気をつけろって言ったのに」
僕、――いや、俺は何を言えば良いんだか。
言ったって意味がないのは知ってるけど――あ～アレだ、弔(とむら)い？
「おい、糞親父……安らかにな」
酒場の一室、どうせいつもの入り浸りで迎えに来たら、日常が一

転した。

親父は胸を刺されて死んでいた。

……間抜けだ。

鳶色の瞳が虚空を映す、いや映っちゃいないか。試しに覗き込んでみたが、完全に開いてる。

……我が父ながら、酷ぇな。

マスターが慌てて俺を親父から遠ざける。それにあえて逆らわず、事の仔細を聞き出す。

なんでも、今しがた現れた客に闇討ちされて死んだ――まったく、どこの小説だよ。作者はきっと絶対ヘボだな。

姿は黒髪黒瞳、黒い細剣を持った男――凶器は見りゃわかるよ。ただよく突き立てられたな、と思ったら、親父殿は急所と言うべき胸板を豪胆にもはだけ晒していた。

馬鹿全開（まるだし）だ――

曲がりなりにも昔は戦場で荒稼ぎした猛将だったとか、俺には些事だったが、どうやらその線っぽいな。

俺はもう少し親父に会わせてくれと頼んだが、拒否された。まぁ仕方ない――こちとら、まだ齢十四のお子様だ。だが、それなりに

成長はしているつもりでもある。

体格は親父譲りなのか結構背は高い。この年で多少も働いてるし、筋肉だって自負はある。顔――はノーコメにさせてもらう。

今だって、さほど親父殿に未練はない。ただまぁ、空気が減ったと言うか、お気に入りの置物が割れたとか、嗚呼、あの双子の人形を壊されたときは、流石に怒ったな。……でも、その時程の激昂は全く沸かない。

沸いてくるのは、単なる喪失感。いや、人の死なんて実際そんなものだろう――人は、死ぬのが悲しいんじゃない、人を失ったことが悲しいのだ。

……手向ける言葉を間違えた。「ご愁傷様」。

あと、興味本位として――「死体」を見るのが初めてだった。それだけだった。

嗚呼、それに関してはちょっと傷ついたかな。身内が死ぬなんて、ちょっと縁起わるいじゃないか。隣の意地悪婆だったら良かったな。

やがて騒ぎになり、官憲がやってくる。やれやれ――

ただ、その中に、来て欲しくなかった奴が混じってやがった。

この町は、ただでさえ「狭い」。領土とか国の規模ではなく、情報の流通がである。

何かが起これば、たちまち町中に知れ渡ってしまう。何処の過疎村だっつうの。

「クリス？」
馴れ馴れしく僕の愛称を呼ぶのが、この白い娘――アリス、だ。
アリスも愛称で、本名は忘れた。親父が拾ってきた、友人の娘。で親父の友人だっつんだから、彼女のお父さんも傭兵だか軍曹だか何かだ。
詳しくは知らないし、知りたくもない。知る気もないし、知ってどうしろっていうんだ。
僕には、何も出来ない。

「クリストファー・ローラント！　返事をして」
「わざわざフルネーム、ご紹介あそばれ、恐悦至極」
「？　何を言っているの」
慌ててきた様子だが、僕の態度にいつもの怪訝な表情に戻る。
笑顔も可愛い彼女だが、僕はこっちの表情の彼女が好きだ。笑顔は信用しないのが俺の、僕の主義だ。

あと、僕が「僕」や「俺」とどっちか統一した方がいいと思うなら、却下だ。社会に対する礼儀みたいなものと思ってくれ。

「おじ様――お父さんは、どうなさったの？」
「死んじゃった」
「……もぉ！」
もぉって、――いいなぁ。……じゃなくって。
「何で君が怒るんだよ。怒るのは僕の方じゃないか？」
「君が、普通じゃないのは知っているけど、でも、でもね……」
……知っているよ。普通は、そう――君みたいな顔をするべきなんだよね？

だけど、俺には……

「涙も無いの？」

「葬式代くらいは出せるさ」

飲んだくれても、ここまで育ててはくれたんだ。それぐらいの礼儀は仕込まれてる。

「親父も親父で覚悟はしてんだろう。だから、残った余生、酒に逃げやがったんだ。良い余生過ごせたんじゃないか？」

「そんな言い方……」

「じゃあ、残念だったねぇ、と親父殿の手向け言葉でも添えろと？

だいたい、親父は誰かに泣かれるのは嫌いなんだよ」

この辺は俺のほうが、親父をよく知っている。

「親父は俺をよく殴ってくれたし、褒めてくれた。料理は不味かったなんてレヴェルじゃねえが、お袋代わりにゃ十分果たしてやがった。飲んだくれても、あんたを助けてはくれただろう。親父は酒に溺れても、騎士は騎士だ。

俺は違う、何でもない、単なる親父殿の子供だ。ただそれだけで何でもねぇ。

親父は戦争へ行って、たくさん人を殺した。その報いが、今だったわけだ。それは自業自得であり、でも遅かった方だろう。俺が成長しきるまで生き延びてくれたんだ。それだけでも運命とやらに感謝だ。

……親父殿にもな」

……なんか、自分で言って、ちょっと目頭熱かった。口に出すもんじゃねえな。

「クリス……」

切なげな、瞳――そんな瞳も、いいけど。なんだ、俺、今変な顔してるのか？

「うん、わかった」

今更だが、喋りすぎた。……ちょっと気に入りだった品に執着が沸いた、ようだ。

「……アリスはどうしたい？　ウチの親父、形だけでも仇打った方がいいのか？」

「そ、そんなこと――ッ！」

……やっぱ、狼狽した顔も可愛いなぁ。

「冗談だよ。復讐なんて負の連鎖、それこそ面倒くさい――でも、会って話くらいはしとかないとな。親父が浮かばれないんじゃなくて、親父を殺した馬鹿に悪い。

復讐なんて、面倒くさい――巻き込むのも、巻き込まれるのもうんざりだ」

「その通りだな」

と、俺は――注意を払っていなかった。

親父と――同じ匂い。酒と汗と男の悪臭、にして老練なる気配。

「復讐なんて、つまんないこと仕出(しで)かすもんじゃぁ、ないな――結局、小僧の言う、負の連鎖を繰り返すだけだ」

「失礼ですが、どちら様で？」

俺は、身構えた。

別に遺言があるわけじゃないが、どうせ生きてたら「おう、手前は死んでも小娘は護れや！　ついでに墓前に酒」ぐらい言い出すだろう。誰が墓参りに酒なんか出すか。

「何。ただの敗北者（ルーザー）さ――」

と、男は――腕の無い姿を晒した。肘下から忽然と失われている、右腕。

俺の親父は――左利きで、そして左腕を失った。

金髪碧眼――秀麗な顔立ちをした、名のある手馴れであろう騎士に。

今、右腕の無い男は――金髪碧眼、かつては眉目秀麗であろう顔立ちは、酒と不衛生がたたって見る影も無いが、その元の顔を失わせるほどではない。

「……親父の、関係者っすか？」

「知り合いといえば、な。お察しの通り――君の父上に右腕を持っていかれた。だが、どうしたことだ」

と、親父の仇敵は、運ばれていく親父を追悼するように、ただ寂しげに見送る。

「ようやく、ようやく復讐を遂げられると思えば、この様だ。俺は、何をやっても、上手くいかない」

――――ソレハ……

「上手く、いかない？」
「嗚呼。いや、人の恥など聞くに堪えんだろう。それともお父上の武勇伝でも聞きたいかね？　……嗚呼、私にはもう、復讐心など――もうない。
私に君らのような子供らを手にかけるつもりなど、なおさらな」
僕は――
「親父の腐れ話だったらいくらでも。子供の頃、裸で町内一周しただとか、襲った街でハーレムやらかしたら、その娘ら全員暗殺者だったとか」
「……」
元、復讐者？　はポカンと口をあけて、固まった。
親父、敵作りすぎだろう。
「豪放磊落――とは聞いていたが」
「実際は単なる変態親父ですよ。俺はその際の失敗作だったそうで」
「……そうか」
失敗作、とは我ながら皮肉効いてるな。
だから、俺は駄目なんだ――
「これから、どうしたものか」
ソレハ――
「僕らだって一緒ですよ。嗚呼、金食い虫が消えたのは楽っちゃ楽なんだけど」
……傍らの、少女を見やる。

この子を引き取ってから、ようやくちったぁマシに働き出すかと思った矢先にこれだ。

「街に、居辛いのか？」

「いや、この娘の親見つけ出さないとマズイんで。俺一人なら何とかなるけど……」

口説きと人脈だけは百人前だったからな、糞親父。

さぁって、俺一人でどれだけできることやら。面倒くさいことになったぜ――

「……君は、辛くないのかね？」

「はぁ？」

「父上が死んで。母上はご健在か？」

「いんにゃ、親父に飽きて蒸発しやがった」

嘘だけど。

「だいたい、俺は親父の失敗作なんだよ。何やったって駄目なんだよ。

だけど、ここまで育ててもらった、それだけで御の字よ」

「……強いな」

「強さも間違ってたら意味ないね。おっさん、アンタ、何が言いたいんだ？」

と、俺らを見据える。

「私は、その強さすらなくて、失敗してしまったよ」

「だったら、今度は成功させましょう？」

今のは俺じゃない。

「おじさん、失礼ですけど……ご家族は？」

「……騎士を辞めたと同時に、失った。私も酒に逃げたのだよ――
だが……」
と、失った右腕を晒す――
「失敗の痛みが、疼くのだ。なくなったはずの腕が、痛いのだよ」
「今も、か？」
「……嗚呼」
まずいな。おっさんあまり信用しない方がいいなぁ。
「……先に言ったが、君らに手を出すつもりは毛頭ない。私にも、
子供がいる、ハズだ」
「ハズ？」
「……家内が、出て行ったのさ。私の子を宿して」
「それじゃあ、会ってただいまを言いに行きましょう！」
……馬鹿な台詞が飛んできた。そんな軽いノリじゃねえっつうの！
「会える筈も無かろう……私は、逃げ出した」
「だからって、戻ってはいけない理由にはなりません！
もしかしたら、その腕が泣いているのは、抱きしめたかった子供
を抱けなかった悲しみで痛んでるかもしれないじゃないですか！」
……へぇ、美味いこと言うじゃないか。かなりくさいけど、
「君は詩人になるといい、その前に、大人の事情を覚えてからな」
どうやらおっさんも同感っぽい、が。
「――呟く。私はその娘に賛成だ。府抜けた二人が」
新たに会話に割り込んできたのは――

……まずいな、殺されそうだ。

剣士――しかも、女。
だけど、この中で一番強い。親父の馬鹿みたいな強さを知っているから、なおさらに――わかる。

多分、親父より、強い。

「ご婦人、貴方は――」
「返答。――何、単なる流浪の者よ。酔い酒と戯れたくてな……もっとも、さきのイザコザで中々楽しめはしたのだが」
と小さく笑うのだが、その言葉遣いと裏腹に、俺に対する何かがおかしい――

「――物語。中々の失敗作だな。親父殿が何を言ったかは知らぬが、君は十分に壊れている。実に良い壊れっぷり具合だ。妹が人と戯れるのも理解できよう」

「……壊れっぷり？」
「分解――必要はないな。己が理解できておれば、それでよい」
……なるほど、間違っている、は壊れていると解釈変えもできるか。

「否定。それそのものが壊れている也。もっとも、己の意思で理解

せずとも、己が理解しているからそれで良い」

「……えっと」

「失笑――一種の精神論よ。我の戯言(たわごと)よ。だが、戯言士の我に言わせて貰うなら、主ら二人は実に腑抜けている。堕ちるに墜ちた騎士とその忌み子よ、主らにそれ以上落ちる場所があるのか？」

「まぁ！　私たちの話、ずっと聞いていたの？」

「当然――殺人現場で平然としている子が、目につかぬ筈無かろうが」

言われてみれば。まぁ、確かに目立ってはいるな。顔見知りのマスターはおろおろ困惑してる。

落ちこぼれの騎士に、風格のある女剣士――俺は親父のガキで、あとはアリス。

また暴れられたら、それこそマスターには厄日だ。

「……俺に、どうしろと」

落ちこぼれた騎士の問いは、

「不可答――そこまで我に面倒を見ろと？　我に何か対価でもあるのか？」

当り前だが拒絶された。

「暇潰(ひまつぶし)。我はただ、腑抜けていると助言するだけ也(なり)。主らに落ちる場所などない。落ちるのは精々、かじり続けたプライドと言う親の脛であろうに」

……言いたいこと、散々言うだけ言って、女は勘定払って帰って行った。

「……なんて人！　人の話を盗み聞くなんて」
「いや、筒抜けだったんじゃない？　マスター」

「ま、まぁなぁ――」
小娘の黄色い声に叱られて、喧騒やまぬ事故現場で、さらに風貌の悪い落ちこぼれ騎士が加わって、極めつけ――あの女剣士。

剣士の癖に、帯剣してないで、それでいてあの物腰と風格。
名前を聞きそびれたが、名のある手馴れと言われても、納得いく。
あの気配は一般人でもわかるだろう。

あれは、人を惹き付ける類の風格だ。それでいて、良く斬れる。
……なんだか、切り捨てられた気分だ

「気にすること無いわ、クリス」
「いや、気にするな――あんだけバッサリ言われるなんて、親父だけじゃねえんだな」
元復讐者も何事か呟いてから――

「……シャンパーニュ」
酒、注文しやがった。
「……見えないな、遺された人生」
「人生なんて見えたらツマラナイさ」
それは、親父の口癖だった。

復讐者は酒を煽る――
「その通りだ。私も、もう一度探してみよう――見えざる人生を」

「そっか……じゃあな」
と、俺はアリスの手を引いて去ろうとし、マスターが引き止める。
「おい、クリス。これからどうするんだい？」
俺は――
「とりあえず、親戚訊ねる。ガルフォニア神聖帝国のどっかに、親父の筋があったとか聞いてるし」
「お、おいおい、遠いじゃねえか――道程、たしか三日以上かかるだろう。馬車代あるのか？」
「大丈夫さ――」
それを、あの男が継ぐ。
「……俺の家だ。片道だけなら、ガードになろうか？」
酒びたりの元復讐者が、繋ぐ。
……俺は――
「　　」
たぶん、また間違った。
――私は、何をやっても駄目だった――
――其レは、月色に染まった夜――
――父をなくした私は、森で私を無くした――
――無くなった私を拾ってくれたのは、片腕の人――
――その片腕の人に、彼の子供を紹介してもらった。友達になった――
――私は、また新しい何かを手に入れて――
――また何を失うのだろう？――

――何もしなくても駄目だった――
――それは、葡萄酒に染まった夜――

――大好きな友達のお父さんが殺された――
――心を失った友達は、涙さえ失った――
――また一人片腕を失った人が現れた――

――失い続ける者たちは、交錯する――

――私には、何も無かった――
――友達には心さえない――
――自由も無く、望みも無く、ついには束縛さえ、失った――
――だから、何をしたって、駄目なんだ――
――何もしなくても、私たちは失い続ける――
――私は、何をやっても駄目だった――

私の前を、二人が歩く。
大好きなお友達と、片腕のおじさま。

私は小さな鞄。おじ様が大きな鞄で、お友達はその間の大きさの鞄。

私は父を尋ねて、
おじさまは子を尋ねて、
友達は……
……何を探しにいくんだろう？

「どうした、アリス」

振り向かず訊ねるクリスに
「ん、なんでもないよ」

霧が深くなる。
生まれた村から飛び出したときと同じ、
あの、迷いの森――

この先に古びた館があるそうだ。野宿にはうってつけの、人のいない洋館。

……何も無いことを願って――

そして、私たちは間違う。

三人目　『勇者王』

――我は王(おう)である！――

――我は王(ちつじょ)である！！――

――我は王(ぜったい)である！！！――

――我は王(ほう)である！！！！！――

――我は王(くに)である！！！！！！――

――我は王(せんじん)である！！！！！！――

――我は王(ゆうしゃ)である！！！！！！！――

――我は王(さいきょう)である！！！！！！！！！――

――我は王(にんげんのおう)である――

「ぬわぁ～～～っはっはっはっは！
長かった、ついに長かったぜ！　が～っはっはっはっは！　が
ぁ～っはっはっはっは！！」
「国王陛下。恥ずかしいから止めやがれ、なのです」
「ん？　何か言ったか？　鶏(チキン)？」
「いいえ別に」
「恥ずかしいから止めやがれ、なのです、と言わなかったか？」
「聞えてるじゃないですか！　この変態暴くぐぼっはぁぁ！？」
初っ端から間抜け漫才をしでかす、執事の青年と――――

裸がいた。

素っ裸、下一枚、しかも腰蓑とか、石器時代でしょうか？
「黙れ、下賤な家畜よ！　我は王である」
「知ってますよ。国王陛下――でも、最低限あるでしょう、国王のマナー」
「タワケがぁぁぁ！　我は王である、王である我が即ち法、秩序、先陣を駆るべき勇者！
その勇者が、何あって、華美な衣装！　頑強たる鎧！　庶民としての軽装？
そんな馬鹿げた衣装など、着なければならぬのだ！」

裸が叫んだ。

が――誰も突っ込まない。

その裸は、
華美な衣装よりも華美で、
頑強たる鋼より鋼で、
庶民的軽装より、
さらに軽装であった。
熟練の達人でも惚れ惚れするような鍛え抜かれた、超鋼鉄の筋肉、
それが無駄なく全身に掘れ込まれたような、整いすぎた筋肉――
さらにそれを惜しみなく晒す、……腰蓑。
身長はさらに恐ろしく、でかい。
執事の青年は、このメンバーの中で王を除けば最長だというのに、
王の胸板までしか届かない。
そして、美形――娘たちを誑かす甘いマスクなどではなく、精悍

に掘り込まれ、獰猛な野獣性を秘めながら、
丸い蒼眼が愛嬌を垣間見せる――
巨大な少年、それがこの旅行王の第一印象である。
そんな目立つ彼らは今――――

山賊に襲われている街、という修羅場にいた。

「……な、なんだ？　この変態どもは」
道理である。
超馬鹿でかい野郎＋執事。
に続くは喪服のような衣装を纏った女性、さらにはピエロが二人
に仮面の怪しい人、
続くは禿頭の青年に、思い思いの衣装の男女数名――

ぶっちゃけ、サーカスに見える。

「愚民が！　王を前にして変態とは……我の姿を見れるだけでも恐
れ多いものだというのに
――貴様は、即刻いね」

「……はぁ？」

……ゲラゲラゲラ

……ゲラゲラゲラゲラゲラ――

哄笑の渦が生まれた。

場をお伝えしよう。

国の入り口に王の一団、

そこから伸びる街道の中央広場に、町民たちが集められ、

鉈や斧を持った山賊一団があちこちに――

お決まりのパターンである。

では、お決まりに添って、退治していただきましょう。

「……国王陛下、私、ちょっと大臣から足洗っていいですか？」

「……チキンよ、我は今、いねと、申したよな？」

「左様で」

「……なぜ彼奴らは自害せぬ？」

『……あ？』

なんかすごいこと言い出しちゃってます。

「我のような高貴な身分に命ぜられたならば、

消えろと言われたなら

その得物をもってして速やかに自害するのが礼であろう？

なぁに、貴様らの遺骸の処理など、王の権限で特別に清掃してやろうとまで計らっていたのだが」

「国王陛下、そこまで無駄なお考え、いえ――咎人たちへの深い配慮……さすがぼがぁ！」

「無駄といったな。後で貴様には拷問だ」

「は！？　ひ、ひぇぇぇぇ」

「たっぷりと『猫』に愛でて貰うがよかろう」
「そ、そそそそそそれだけはご勘弁をぉぉぉぉぉ！」
鶏（チキン）だけに、猫のような肉食類は苦手のようです。

「国王陛下？」
と、先ほどから後ろで清楚なほほえみを湛えていた、黒い喪服の娘が前に出て、
「なんだ？　我が妻よ」
と国王陛下は抜かしやがりました。
これにはさすがに山賊さんたち、ぶち切れました。
かなりの美女です。
喪服なのに胸から腰にかけて、ふわっ、しゅる、ポヨン
……ボッ、キュッ、ボンとはまた違った、柔らかくしなやかな体の持ち主です。
顔だって王に負けず、色白ながらも整った美しい娘です。
「彼らは咎人（とがびと）、咎人は王と言う秩序に反する輩（やから）と存じ上げます。
即ち、彼らは王の技量――度量を推し量りたいのでしょう。
これすなわち、国王陛下への試練とも考えられます。如何でしょうか」
「ふんっ、我が妻ながら、我より裁量が深い――ならば、問おう。我はいかにすべきか？」
この唯我独尊は珍しく思慮を乞うのは、無論、妻である彼女だけっぽいです。
「デコピンで退治してみては如何でしょう？」
そして、彼女も馬鹿っぽかった。

で、馬鹿馬鹿しい事態が発生。

「そうか、デコピンか。アレは確かに楽しいぞ」
鉄球が出てきた。

大人の頭、三つの穴――どこぞの現実世界で言うなら、ボーリングとか言われそうな、そんな鉄球が、突如あらわれて。
「次々と人が倒れていく様は、見ていて中々滑稽であろう？　妻よ」
「然様でございます。国王陛下、我が君……」
あらあら、顔赤らめちゃってますよ奥さん。どこのバカップルだよ、おい。

そして、投擲――否、本当にデコピンでぶっ飛ばす、馬鹿力王。
そして飛来する鉄球は、ありえない軌道で山賊たちに襲い掛かる。
緩やかなカーブを描いていたと思えば、スピードが徐々に上がっていき――

「って、お、おぱぁぁぁぁぁぁ！」

「こ、これ――鉄球じゃねぇッ！」

「ご名答です。それ、【重力弾（グラビティ）】です」
にこり、と笑う国王のお嫁さん。要するに女王陛下ですね。
「私（わたくし）、魔族ですので、闇魔法を少々」
と、両手にポンポンと黒い鉄球を次々生み出しては、
「そして、勇者王ことこの我――最高のパートナー同士ではないか！」

いまいちパターン化しつつある、人と魔族のコンビの模様。山賊さんたち、最悪です。

「ごるわぁぁぁぁぁ！」
巨漢の山賊登場。重力弾を自前の筋肉と大斧で粉砕ッッ！

「おぉ～！　ゴーグッ！」

「やっちまえ怪力馬鹿！」
「出番だぜ、ウチの筋肉担当！」
仲間の声援付きで、人気も高いようです。
「ほぉ、愚民の中にも中々やるの」
と、ずいと前に現れる国王――なんと、怪力山賊（ゴーグ君、推定３０歳）よりも図体がデカイ。
「よかろう、我が直々に遊んで……やりたいのだが」
国王陛下、唇を尖らせて――
「実は、餌の時間でもあるのだ。おいで――聖剣エクスカリバー」
定番の名前が出てきた。
『出番おせえんだよ！　勇者王なめんなボケ王子ぃぃぃぃ！』
聖剣――飛来。
「ちっちゃぁぁぁ！？」
ショートソードが出てきた。
違う、確かに伝説や伝承に伝わる装飾華美で、魔力パッツンパッツンの超強力魔剣、いや聖剣なのだが、
使い手が規格外なくらいに、デカイ！
腕の太さが女性の腰周り（痩せ型女性）級で、身長だって大の大人を三回りは軽く超える。
『しかも、餌の時間って何だ！　餌ってのは！　俺は兄筋の魔剣、グラムとは違うわぃ！』
「我の力を食らうのだ。変わらんだろうに」
『戯（たわ）けぇぇぇ！　そりゃ単にお前が剣を使えないだけだろうがぁぁ

ぁ！　いちいち振り回すだけで、疲れた、ってそりゃ飽きたっつうだけだっつうの！』

ロクでもない話が出てきた。

そう、この国王、聖剣が規格外に小さいので、もっぱら素手で戦う乱暴極まりない勇者様だった。

騎士の誰もが憧れる、伝説のあの聖剣を、この馬鹿王は持て余していた。

いや、聖剣のほうが、主を持て余しているのだ。

「世は聖剣の力などではない。愛だよ、愛こそが力なのだよ！」

「きゃん♪」

『単にエンキドゥと乳繰り合って説得しただけじゃねぇか！　そこ嫁！　年考えてキャンとか言え！』

「なっ！　聖剣といえど、我が妻を侮辱するか！　即刻圧し折ってくれよう！」

『やってみろ、変態思春期馬鹿王子！』

「我は王だ！」

『俺からしてみりゃ、ひよっこ王子よ！　剣もロクに扱えぬ阿呆王子！』

そして――惨劇が始まった。

聖剣から放たれるビーム、ビーム、ビーム！

例『聖鋼練磨界戟！』『陀羅尼盆ッ』『煉獄改光澪』『奥義　聖成剣乃運命』

そして筋肉王から放たれる、しなやかかつ鋭く、美しくも肉体迸る、拳と拳！

例『右フック！』『左フック！』『波動戟』『地砕』『必殺　愛羅武　縁軌道！』

それを涼やかに見守っていたのは、妻だけのもよう。
っつか、国王引率の国民たちは速やかに非難。山賊やら町の人たちを促して、物陰に非難――

どうして人と剣の喧嘩で、大爆発とか起こるんでしょうね？

「な、ななななな何なんだよ！　あの人間規格外の化け物はぁ！」
「あの人は、我が国の国王陛下にして、立派な勇者王でございますのよ」
と、戦意喪失の山賊さんに、奥さんのエンキドゥが微笑みます。

「もともと勇者の家系でして。聖剣やら魔法剣と対等に渡り合え、魔族や魔王、魔神と命がけで渡り合える者たちが、【勇者】と呼ばれます。
彼もその一人だったんですが――」
「優しすぎたんですね。我が馬鹿王子は」
とは、執事、鶏君（チキン）。

「初めて勇者として戦った、エンキドゥ王妃を、一目惚れかつ、暴走を生身で引き受けて――一夜にしてそれを収めた――」

「そう、勇者たる証――人が持ちうる最終兵器、【聖剣】や【魔剣】

を持たず――生身で！」
と身を震わす魔族の奥さん。
「嗚呼、あなた方に私の感動がご理解できて？　一人ぼっちで、何も知らず孤独だった私が、初めて――初めて」
「はいはい、その話は百と七十三回おぼわぁ！」
「鶏ぃ！　我が妻を虐めるなぁぁぁぁぁ！」
王様は地獄耳もお持ちのようです。

「うぐぅ……、国王は常々悩んでおられました。何故人と魔族は手を取り合えないのか。
なぜ争い続けるのか。そして出た結論がアレです」
……アレ……
聖剣と大喧嘩すること？

「いえいえ、世直しの旅ですよ」
世荒らしの旅の間違いですね。
「怒環（ドワ）っ波ぁぁぁぁぁ！　何だ、誰だ！　我らの覇道にイチャモンをつけるのは！」
真上に向かって、真空波を放つ！　ってか、どれだけ規格外なんですか、この勇者王ッ！

「我々は、正直、あのば……じゃなくって王子……でもなくって、国王陛下が、大好きなんですよね」
「そうそう、暴れん坊でハタ迷惑極まりないけどさぁ」
とはピエロの少女。
「結構純粋な所ありますし。何より――」
と紅いドレスの娘――

何だか、気配が一段、変化。

山賊たちの周りには、サーカスの面々（大間違）が集っており、住民たちは被害の少ない家屋へ押し込められ、
家屋から抜け出した子供たちが、その姿を見つけます。
『魔族（われわれ）を受け入れてくれる、数少ない優しい人間ですから』
鶏と呼ばれた青年は、石化の瞳を持つ魔鳥、コッカトライスに。
ピエロの少女は、淫猥なサキュバスに。
紅色ドレスの娘はヴァーヴァンシーと呼ばれる、悪意の精霊に。
「いえねぇ、国王の方針ですから――って言うのもありますけど」
と、サーカスの裏方っぽい方々……の気配はまた違います。
なんだか、人間っぽいです。
「意外と、気のいい奴らばっかりなんですよ。まぁ、国王陛下が一度、凹ましたって経緯もあるんっすけどね？」
と、軽薄な青年が親指を立てて微笑む。
その背後で国王陛下とエクスカリバーの放った光線で、瓦礫が飛んできて、青年は吹っ飛ぶ。
コッカトライスはその青年を翼で受け止めて、
「っつか、そろそろどうにかしましょう！　女王陛下ぁぁぁ」
「はいはい――では」
と、女王陛下は……漆黒の翼をお広げなさいました。
彼女は何なんでしょうね？
「ギルガメッシュ陛下？　聖剣エクスカリバー？　もうお止め下さい。でないと――」

世界が、真っ黒に包まれた。

「食べちゃいますよ？」

それは、影であった。

ありとあらゆる影たちが、地面を支配し、飲み込み――実際、木々や建物が幾つか、沈んでいる。

「む、エンキドゥ……悪食ははしたないぞ」

「あら、陛下こそ。みだりに争っては王の威厳に関わります。

もっともエクスカリバーさんにしたってそうですが、偉大なるお二人が、揃っていがみ合ってはどうでしょう。

確かに、お互い諌めあって、各々を高めあうための戦いは必要でしょうが、この国の領民にまで被害が及んでしまえば、王の資質に関わりますわ。

どうか、お願いですからお止めくださいな」

やんわりと、童女のように微笑む、伝説の魔獣――終端へ導く、神々を喰らう運命（さだめ）を架せられた、獣。

殺神種（ラグナロク）　固体呼称名――『混沌（カオス）』。

第一級、災害指定魔族、最上級中、最強最悪の魔物――無形の混沌。

「そうだな、我が妻よ――ふ、我もまだまだ未熟よの」

『そうそう、精進してさっさと俺を使いこなせ。変態』

「戯け。使いこなしてほしければ、刀身を十倍引き伸ばして出直し

てこい」
「二人ともぉ？」
ずぶずぶ間抜けな一人と一本、沈み始めます。
「のわぁッ！　エンキドゥ、怒っているのか！　なんとしたことか……どうしよう、エクカリ！」
『知るか！　耳元で愛囁いてこい！　それでお前、ねんごろになりやがったんだろう、エロ王子』
「エクスカリバーさん、イタダキマス」
混沌の能力１　何でも吸収し、食べちゃう。
「やるがいい、我が妻よ！」
『でぇぇぇぇ！？』
「我が君？　ハムハムハム」
「何！　王をハミハミするなどのぉぉぉ～～～！
や、やめんか、エンキドゥ！
温厚な我でもちょっと怒る……だ、だめだ、やめろぉぉぉ！　我は着物を着ておらんのだぞ！」
変態だから。
変態、影から脱出！
「エンキドゥ！　もう許さん――」
華麗な跳躍だけで、影の坩堝から脱出し、
ついでにエクスカリバーも助けるオマケつき。あ、捨てちゃった。
「手前ぇ～」
「こ、こ、く、くくく、こ、国王陛下ァァァァァ！」

と、突然王妃の悲鳴。

泣き叫ぶような悲鳴は、まぁ当然だった。

影の捕縛を、力任せで脱出しちゃえばまぁ、当然だった。

当然の結果だった。

王子、前面部、ご開帳〜〜〜……

やる気どころか、凶悪な魔族軍と、それを束ねる正真正銘の勇者王を前に、山賊たちはやる気どころか精力まで絞り取られ、

最終的に、この序章は――

この話らしく、最期の一音で終わらせよう。

普通の恋人達らしい、辱めの張り手の音で――

パチン

『0th Story Stand by』

―【Stand by】―

俺がたまに思うことは――世界にはなぜ、真実がないのだろうか？
その一点につきる。

まず、【真実】について思考しよう。

それは他人によって千変万化する、人の主観の瑣末に過ぎない。
……そうではない、そうではないのだよ。

俺が望むのは、たった一つ。
事の仔細なのではない。わたしが求める真実とは即ち――

その【裏側】なのだよ。

なぜその事態が起こりえたのか？
なぜその事態に転じてしまったのか？
なぜその事象における、当事者たちの心境は？
それがどう転じたのか？

故に、私の望む事象など、やはり自己満足に過ぎぬ、瑣末な事象なのかも知れぬ。

だが、俺は知りたいのだ。
紅蓮の賢者は得たいのだ――

かの蝶の天使の、真の姿を――

見目麗しき、彼女の素顔を――

ゆえに俺にとって、かの三人など、どうでもいい駒に過ぎない。

たかが教会の廻し犬。
片腕の元将軍と、そのガキども。
ただ魔族を従えたと言うだけの、単なる勇者。

奴らがどれだけ矮小で、どれだけ強大であろうと、
彼女の前では、瑣末、瑣末。

さて、我が真実を見届けるために――その駒たちの真実を、
まずは並べよう。

何故あのような事件へと転じたか。
あのような事故――

この事象は後に、歴史に埋もれる瑣末な事件として扱われる。

怪奇館虐殺事件――何ともネームセンスのない、率直な事件である。

だが、俺はあえてこう言おう。

これは、彼女の仕業ではない。

奴の名は――【血蓮公爵（クリムゾン）】。

ザックス・バーンフレア

3人『Stand By OK』

『粛清者』―【Ｓｔａｎｄ ｂｙ】―

「父上、報告書を持って参りました」
僕は扉を叩いてから、部屋に入る。
肉があった……父さん、また太ったな。

「よぉ（ぼぉ～）……マイサン」
肉が、動いた――
運動したら？　何て台詞ももう数えられない、くらいに――

横幅三人すわりの椅子を、たった一人で占領できるほどの……質量。
脂ぎった輝き、皮膚――ちなみに横幅を占領しているのは、腹肉ではない。太股だ。
身長と横幅がほぼ一致――全身これ肉まみれ、にしてなお、人間の形を最低限とどめている、……だけ。

「ボツボツはかどっとるようヤン。マイサン」
ちなみに、読解は難しい。喉も肉によって圧迫されて、発音にするなら
「ぼふぼふはかどっどるぼぉ～やん。マイサン」
マイサンだけが、微妙に明瞭。あとは無茶苦茶。

そして、もう一つ――
散らかっている。白く、白く。鮮明に記載された黒い羅列。だが父の周りにはいくつか赤いしるしが付けられる。
聖典帝国、司祭長にして教皇補佐官――我が養父、デューク・セ

クサリス。
この肉の塊は、もう十年近く部屋に篭りきった結果である。
なぜなら、この部屋の書類はすべて――１０年前の戦争の負債が記され、そして父はそれを全て背負っていた。
魔王男爵デューク。

人ながらにして『魔王』の称号を持つ、聖典を掲げる教会の異端にして、最高権力者の一人。

「あら、セラフィスじゃない」
と、顔を本当に肉のそばからひょこっと顔を出したのは――義母(かあ)さんだった。
レイルード・セクサリス。

世の中は不思議だ。なぜ肉達磨にこんなすらりとした美人がお嫁に行くんだろう。
誰もが『金と権力だって』と、陰口(かげぐち)るが――

恋愛結婚だってさ――

世の中って変だ。実に大変だ

「ロクでもねぇこと考えてンだろう、テメェ」
と、肉声で父さん。鋭いなぁ――

「父さん、本当に恋愛結婚なんだよね」
「フッフ、まぁ、確かに今のこのブヨンブヨンじゃねぇ～」

と、秘書風バリバリの雰囲気を放ったまま、童女のように笑みを浮かべて、どこかの肉をポヨポヨ叩く。
義母さんが、こんな風に笑うのは、父さんの前だけだ。
……なんてわかりやすい夫婦なんだ。

「昔は格好よかったのよ。翼生やして天使の真似事して――勇者君と組んで世直ししてたし」
「その人気がたたって、今じゃ五年の引き篭もりよぉ～。なぁ、今日は晴れか？」
「今日は雨です――父さん」
「そぅかい……悲しいことでもあったんかいなぁ～　御天とさん……」

そういいながら、父は一枚の報告書に眼を通す。

「不死者か……ご苦労さん」
「父さん、僕は生身の人間なんですよ」
「生身の魔術師がへ～こら弱音吐くな」

そう、僕はなんてことない――
正体は、単なる魔術師だ。
体力に至っては、成人男子の平均か以下――
いや、それなりに鍛えてはいるから、平均以上といっておかないと、
他の騎士たちに悪いか。

「じゃ、張り切って二人目いくか」
「まてよ、糞親父」

あ、裏僕登場。

……きゃっは♪

「何回言えば聞きやがるんだよ。僕は生身で、普通で、純粋無垢な生粋のお人間ちゃんなんですよ？」

「魔力異常飽和（オーバー・キャパシティ）、
未来予知（ブルー・アイズ）
武器生成（フル・ブルーム）：大鎌
未成熟体質（アンアダルト）
加えて飛翔（フライング）体質
……なぁ、お前、自分が通常人類だって胸張っていえるか？」
「言えます」

親父にだけは言われたくないな。人類十倍。体積が（親父の陰口その２。

「魔力異常飽和に至っては、戦災孤児に見られる、基本的疾患です。主に戦死者、死亡者の残留思念、いえ残留魔力を吸収してしまった結果」
無論、僕のことだ。

「未来予知だって大げさな。
実戦経験と体術の予備動作で相手の行動なんてだいたいわかるでしょう。
周りの瑣末な異変、異常を敏感に察知するだけで、
いつ何が起こるか――わからなくても身構えるくらいはできます。」
そして、部隊を率いる上では、こういった周囲への気配りはやはり必須だ。

「武器生成――だって、僕はこれしかできないんですから。
植物霊（ドライアド）たちを精錬して、鎌モドキを形成する……」
「よく葉っぱで人体切断できるなぁ」
「植物繊維の威力万歳」
ありがとう、僕の観葉植物たち――

のあとは、僕は散々親父と義母さんに愚痴愚痴いいながら、書類を持って退出していた。
アレ？　……なんだかんだで仕事請けちゃったし。

……いつの間に丸め込まれたんだか。
畜生、まぁいっか――

「あいつ、生まれる時代、絶対ぇ間違ったな」
「かと言って、少し前に生まれてたら、本当の地獄よ」
「嗚呼、戦争の後だからこそ、か。皮肉な力だなぁ――」
「また留守番だから、お花に水入れてあげないとね」
「また怒られっぞ？　こないだ肥料多くあげたらえらく叱られたぜ」
「ふっふ、でも、あの子。本当、花を生けるのが上手いのね」
「自分の人生を失敗しちまったと思い込んでいるんだ。その分、他人に酷く優しすぎる。それが弱点だ」
「……そうねぇ」

「で、あの子――次は何処へ送ったの？」
「ゾンビが頻繁に出るって話の森と、その館」
「……あそこ、確か――」

「んなん？」
「……アズリエルの目撃情報がなかったかしら」
「ぶっぼっほぉ！！！」

『薄幸の少女』―【Ｓｕｔａｎｄ　ｂｙ】―

さて、私たちアリスと愉快な仲間たちは一路――
大自然に囲まれた緑溢れる世界にやってきました。
ぶっちゃけ言っちゃえば、森の中。
えっと――ここ、どこ？

以下、回想シーンの始まり始まり～

「もう少しで広がった場所に出ると思う」
とは、元復讐者のおじさまの言葉。
「迷子になるんじゃねぇぞ」
とはクリスだ。生意気だぞ？
「で、ここはどこです？」
私の言葉に、二人――
『……さぁ？』
この二人ッ！　駄目すぎる！？

「だって、ここ一本道だろう」
「戦時の記憶だが、この先に大きな洋館がある。
かつてこの森を統治していた領主の館だったのだが……我が軍が滅ぼした」
おじさま、実はすんごい人だった？

「その領主は、ガルフォニアの貴族であったのだが、邪教と繋がっていて――
結局、教会の威光で我が軍が動かされたのだ」
我が国がだいたいどのような国か、ご理解いただけたかな、と、おじさま。

「邪教繋がりか――危ねぇ森じゃねえだろうな」
「粗方片付けた記憶はあるが、あんがいキマイラがいるかもな」
おじさま、意地悪……

GRYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY……

……い　た　し　……

～～で、現在～～

今日の夕飯はお肉になりました。
おじさまが剣でバッタバッタ薙ぎ払っちゃうし、
クリスもおじ様仕込の喧嘩術と短剣術で私を助けながら、おじさまの邪魔にならないように。
私は後ろでキャ～キャ～喚いて……クスン

「……おうちに、帰りたいよぉ」
「お前、よく家出してきたな」
「私は迷子になったんだって……」
お父さんを探しに――

幸い、現れたのは魔物のキマイラじゃなくって、単なる野犬だったらしく、
クリスが火をつけた松明を作ったら、あっさり退けられた。

「……ふん、明かりか」
不意におじさま。
言われてみると、奥のほうでほのかな明かりが。

よくみると、木々の奥に覗く、白亜の影――

大きなお屋敷の屋根が――――

『勇者王』―【Ｓｕｔａｎｄ　ｂｙ】―

「我は『勇者（はだか）』であるッ……」

……

「おい、チキン。今、ボソリと何か言わんかったか？」
「いいえ、国王陛下。断じて　はだか　などと、公衆の面前を憚（はばか）りなく豪語するような台詞、断じて」

「誰か？　おい、猫――鶏と遊ばんか？」
「失礼致しました国王陛下。今、はだか　と断じて言いました」
「うむ、死刑。猫、Ｇｏ！」
「……や、やさしく食べてくだぎゃぁぁぁぁぁ！」
あまりにも可哀想なので、描写するのは省こう。

あの奇天烈な町での大騒動の後は――
このようになった。

「おい、筋肉――」
「……うが？」
「我の肩を揉め」
「うがぁ」
あの山賊だったゴーグ君がもみます。
「エンキ、今日の伽は寝かさぬぞ」
「まぁ、ギルガメッシュ陛下ったらぁん！」
バッコ～～～ン……

カオス拳骨。パンチにあらず、影が一個の拳になって陛下を彼方にぶっとば――

「そこの雑魚一」
帰還早ッ！
「名も無いキャラは適当っすね。こないだの山賊、最初にぶっ飛ばされたのが自分ッす」
どうでもいい紹介だった。作者も忘れているぞ、絶対。
「うるさいぞ雑魚Ｂ。そうか、我直々に拷問をもらいたのだな？
だが、我も多忙だ。
代わりにおい、ライオン」
「俺、スフィンクスですって――国王陛下」

「えぇい！　どいつもこいつも！　我が間違いを犯しているというのか！　ならば言うてみろ！」
『存在そのもの』

一同、合唱。

「よし、たまには勇者らしく、魔獣成敗＋おまけとしゃれ込もう。全員、我直々にお仕置きしてしんぜよう！　来い、エクカリ！」
「エクスカリバーさまは現在、聖剣ブリュンビルデさまとおデートだそうで」
「ば、馬鹿なッ！　剣の分際でデートだと！　チキン、ならば代わりに貴様が我の剣と成れ！」
「な、ちょっ！　おま……」
「今、お前と言おうとしたな？　あとで猫餌だ。あと、魔剣コッカトライスと言うのも洒落ておらぬか？　相手を次々に石化させるのだから」
石化の部分、洒落になってないぞ。
「あら、大丈夫ですよ？　石化解呪は乙女の嗜みです」
「ねぇ～」
平和な女性陣、エンキドゥ妃に陽気なナイトメア、優雅に微笑む赤い髪のダンサー……

「ふっふ、本当に平和ねぇ～」
何故か眼から石化ビームを出す、魔剣コッカトライス　執事服装備を、片手で振り回す巨大なガキ。

魔獣と人と、そして勇者の混戦パーティ。なのだが――

実際は違う。

魔獣たちは危険動物であり、人間パーティには山賊だけに留まらず、元海賊やらならず者達が大勢いる。

そう、彼ら勇者組みは、俗に言う『お尋ね者』。

前述の村の壊滅は、明らかにどっかの馬鹿王と「誰だ！　我の悪口を叩いておるのはぁ！　覇ッ波ァァァ！」

……失礼、人間規格外の王と、不良聖剣エクスカリバー（彼女持ち）の喧嘩によるもの。

怪我した山賊や魔獣たちが総勢で修繕できる箇所は治したが、

……魔獣たちをあっさりと受け入れてもらえたかと言うと、そう言うわけにもいかない。

ホッと一息ついたエンキドゥ妃に浮んだのは、子供たちの眩しい瞳だった。

絶対の混沌、唯一無二の黒――殺神種にして災害指定、そんな彼女にも等しく降り注がれた、憧憬の光。

子供たちほど、無邪気な光は無い。

彼らには区別が無い、区分が無い――平等に、浴びせられた、彼女への輝き。

触れただけで石化する、と揶揄されるチキン、いえいえコッカトライスにも「兄ちゃん大変だな」と同情を浴びせるませた子供とて、コッカトライスには新鮮な情景ではないだろうか。

人は、弱（よわ）い。
人は、弱（もろ）い。
人は、弱（ずる）い。
人は、弱（かしこ）い。

人は、弱い。
人は、弱い。

人間は――弱者だ。

――違う。

初めて、魔獣たちを否定したのは。

子供の勇者だった。
子供な勇者だった。

「泣きたいんだったら泣けよ！　苦しいんだったら叫べよ！　助けて欲しいなら言えよ！　俺が飛んでいく！
どこへだって、どこだって、俺は王様になるんだ！　いや、今、王に成る！
決めた、王になってやる、お前の、お前たちの、世界の王になって救ってやる！
人も、魔物も、人外も、誰でもだ！」

……本当に子供だなぁ。

石化した従者たちを足蹴にしている王を見据え、
「陛下、石になったのを壊しちゃったら、元に戻りませんから気をつけあそばせ……」
遅かった。
ガッシャン――

1【いらっしゃいませ】

1　【いらっしゃいませ】

その屋敷は、広く大きく、そして美しく聳え立っていた。
ただし、門は朽ち果てていた。
両開きの扉の鉄格子はひしゃげ、雑草は生い茂り、
門番の役目たる番兵石像（ガーゴイル）も、どこかの王が壊したよりは慎ましいが、頭が欠けている。
もう片方は翼さえない。

廃墟――

そんな廃墟を、たまに訪れる者たちが居る。
旅行者。冒険者。放浪者。

ようするに、森を通る者たちなのだが。
日の落ちた森で、然様の大きな館は救いには違いない。
逆に日の昇る日時には、森にぽっかりと空いた巨大な空間を形作る、異様な威圧感に恐れを抱くかもしれない。

元はこの地に飛ばされた貴族の屋敷であり、
戦時に没落した地でもあり、
今では、旅人たちの野営地となっている。

下手なテントより頑丈であり、雨宿りは無論、多少の設備も残っており、たまに金目のものが見つかれば路銀の足しになる。

そんな場所で、
そんな屋敷で――
今現在、そこで居座る者あり。

粛清者、の少年ではない――

では、幸薄い少女の姿――ではない。

ならば、勇者王と愉快な仲間たちか？　違う――

では、誰か……
今、大広間に来客が現れる。では、彼女に……説明してもらおう。

私たちが両扉を開くと――先客がいた。
私たち以外にも、この森を抜けようという旅人さんだろうか？

その先客は――眠っていた。

大広間、にこの館の庭かどこかにあったであろう、簡素なテーブルと簡易椅子を敷いて、背もたれを後ろに倒して、

その少女は、眠っていた。

寝息が聞えるほど、室内は静だ。

ただ、様相が……少し、いや――

かなり、変だ。

「おん、なの子？」

クリスが声を出して首をかしげる。

戸惑うのも仕方ないと思う。

女の子が着るには似つかわしくない。

全身黒衣、くわえて――あれは、アイマスクなんかじゃない。

手拭（てぬぐい）か何かだろう、黒い布状のものが目元を覆って、少女の表情を隠している。

……この前死んだ、おじさんが浮んだ。

または、縛られて動けない、そう――拷問されているような、そんな印象さえ浮んだ。

「……誰だ」

警戒心は、私だけではなかった。

おじさまですら、彼女に戦慄している。

テーブルにはティーポット、椅子は三脚、うち一脚に少女が。

不意に、少女が立ち上がる。

……伸びをした。

骨と筋肉がパキポキと鳴った。……寝すぎ？

こっちを向いている、ような気がする。目隠しでよくわからないのだ。

あ、首を傾げた。

手招きしようとしたのか、どうしようとおもったのか、考えあえいでる？

と、クリスが勇敢にも進んで、少女と面向かう。

「君は誰？」

「……」

無言――でも――

『私は、レメラ――放浪者』

……文字が浮んでいた。

『ワケ合って、私は喋りません。だから、筆談を使います。ご無礼を』

「……閃光魔術、か？　昔見せてもらったものに近いが」

おじさまが近づいて、少女が身を強張らせる。

『貴方たちは？　誰？』

「俺はクリス。単なる保護者だ」

「私は――――。彼らの護衛兼、案内人だ」

「あ、えっと、私はアリス。お父さんを探しているの」

少女は――表情が見えない。

背丈に関しては私よりちょい、下？　子供だ――

なんで、こんなところに？

少し躊躇してから、少女は空に文字を描く。やはり光る指先で、流麗な線を描く。

『魔術に関しては知りません。勉強せずに習得したので。

私はここで姉を待っています。長旅で疲れたので休息を――』

「同じく似た様なもんだ。今日はここで寝泊り、って時間帯でな」

『もうそんな時間なのですか。姉さん、遅いです』

小さくため息。

少女の瞳は伺えないが、どうやら休みすぎて疲れたような――

『……せっかくですから、お茶でもどうです？』

書き出したのは、彼女が先だった。

さて、レメラについては筆談から得た話をまとめてみる。

彼女は姉二人と旅する、放浪者。

――旅人には何種類かいて、戦地や洞窟など危険にわざわざ飛び込もうという冒険者（アドベンチャラー）。

彼女らのように、当てもなく各地を転々とする、放浪者（フリーター）。

そして、故郷を持ちながらそこを起点に気ままに旅する、旅行者（トラベラー）。

彼女たちには、故郷がない。

言われて納得できた。娘三人で当てのない旅など、危険極まりない。

旅行者なら旅の際に護衛を雇えば良いが、他は違う。

冒険者は危険が伴っての商売だが、放浪者には伴う障害（リスク）にすぎない。
故郷がないと言うのなら、理解のできること。

レメラはいくつかの旅話を聞かせてくれた。
……何でも、姉二人は凶悪に強いらしい。
大型剣を片手で振り回す長女に、
魔術、武術、あらゆる戦闘技術を備えた優しい次女――
……そして、彼女は『歌手』だと言う。

「あ、歌えるんですか？」
小さく頷くが、
『訳あって、普段は声を発して歌わない。いや、歌えないのです』
と、申し訳なさそうに首を横に。
アイマスクの下で眉が歪んでいたのがわかった。

「歌えない事情でもあるのか？」
レメラは何か書こうとして、ためらってから――こう記した。
『私は、自分の能力故に、歌しか歌えないと言う特殊な体質を持っているんです』
「……魔力異常飽和（オーバーキャパシティ）」

不意に、おじさま。さり気なく猫舌で、レメラが淹れたお茶を口先で冷ましているのが面白い。

「戦災孤児に現れる、特殊な疾患。
人間の体内には基本的に、循環される魔力量――魔術を扱う際に消費するエネルギー、が一定率、決まっている。
が、戦時中の大戦で流れた、死者の魔力が、生き残った子供たち

に流れ込んで、飽和している状態だ。
この子供らは通常より強力な魔術を操れると言うか、残念だが長くは生きられない。
魔力に溺れすぎて廃人と化すか、禁断術に手を染めて魔人となるか――この子供らを使って強力な兵団を作ろうとした奴が居たが、その子供らに逆に殺される始末だった、とか」
「どうしてです？」

合の手を打つのはクリスだ。こういう話渡りは私より上手い。
「能力の暴走――そしてその子供たちの戦争での恐怖が、魔力を使い物にならなくしている。
それを無理矢理使わせようと言うのだ。子供たちは自決したり、調教者たちに刃向かい――ある強大な力を持った少女に滅ぼされたらしい」

へぇ～……。

『たぶん、違います』
と、文字が躍る。
『私や姉さんたちもそうですが、基本魔力量は一般並だと思います。実際、私の声は魔術とか、そう言う因子ではないんだと思います』
「ふむ……では、何だと？」
『体質――』
……体質？

『私たちは、生まれすらわからないのです。
父や母がいるのだろうか？　それこそ、人間なのだろうかどうか――』
……お茶をすすりながら、とんでもない事を言い出す。

「人型の魔族、だとか？」
『それしか考えにくいんですよ。自分たちの異能を説明するには』
――――？
他者の気配。それは私ですら気付ける、大勢の、大所帯の気配。
両扉が叩き開かれ、日暮れの陽光を背負って現れたのは――
『我は勇者（おう）である！』
……裸の王様でした。

2【今回のホストは彼女でございます】

2【今回のホストは彼女でございます】

王様登場とともに、レメラが素っ頓狂な悲鳴をあげて逃げ出した。

「ぬぬっ！　なんだ、あのリアクションは！　おい、チキン！　あの小娘を捕らえろ」

「うわぁぁぁぁ！　ついにやっちまったよ、この馬鹿キング！　普通に考えやがれ糞王！　あんた裸なの！　マッパ、全裸！！　通常法律によっちゃ猥褻物陳列罪で、おロープ頂戴の場面だっつの！」

「チキン、貴様、王に向かってその態度！　それに、我こそが法！」

「その法律が間違ってりゃ、民の意見によって変更できんだよ！」

とりあえず、あの娘さんへの誤解を……

猫さん、馬さん！　どうかお願いします」

「私、ケットシ～だってぇばぁ～」（爪きらり～ん）

「……俺、馬頭鬼（めずき）……いいけどさぁ」（やれやれ……）

なんだか、すごい人々です。頭が馬だったり、猫のような愛らしいお姉さんだったり、

……極めつけは、アレですけど……アレ……

「そこな娘、我に惚れたか？」

「違います、馬鹿陛下！　っつか前隠せ、前！　腰みのからはみ出したら辞職しますからね」

「なぬ！　なぜ我が穿いていないキャラだと見抜いた！」

「んなフラグ嬉しくねぇぇぇぇぇ！」

フラグってナンデスカァ～？
理解不能です。
……わ、私別に、真ん中に視線なんかよせてませんよ？　下の方なんか、恥ずかしくって恥ずかしくって！
「……アリス、くねくねして気持ち悪い」
クリスが本当に嫌そうな声で言いました。はい――
「……狂勇者、ギルガメッシュ？」
とは、おじさま。誰ですか？
「そこなロマンスグレー、我を存じているのか？　と言うか、狂勇者とは何ぞや？」
「ハンターズギルドの指名手配に乗っている。魔族と手を組んだ、勇者の面汚し、と。
だが、その罪過はギルドが下すには重過ぎる、精々山賊並の、殺戮は行わない、勇者像としては間違っていない人物でもあると。
ただ、手を組んだ魔族たちが、A級、S級と……その存在だけで危険とされているモノが多いと、ギルドが裁定を下している、だったか」
おじさまは、淡々と彼を――彼の周りの人々を見据えて――
「視線を合わせれば即死する、コッカトライスがいることまでは知っているが」
「あ、それは私のことですね」
と、突っ込み役立った執事さんが挙手――って、えぇぇぇぇぇ！
「それは俗称ですよ。魔眼なんて調節できなければ、役立たずじゃないですか――っつか、破られましたけどね」

んっふん！　と胸を誇らしげに張る、裸キング。

「……正直、会えるとは思わなかったし、会いたくないと言えば言える人物だが」

おじさま、もう一度玄関口を見渡し――

「危険はないと、信じたいところだな」

「んっふっふっふ、我の偉大さが伝わっているようだな。我が名誉の前には、侮蔑すら賞賛に値されよう。

そこな下民ども、我は機嫌がよい。我が名において、そなたらの安全は保障しようではないか――」

「そうしてくれれば、助かる。……王よ――」

おじさまは躊躇いがちに、裸ン坊を王様と認めました。

「さて、故に怯える必要はないぞ――そこな――」

……え？

王の表情が一遍する。

私も、目を見開いた。

馬頭の人が――仰向けに寝転んで、

猫お姉さんが、泡を吹いて倒れてて――

「……小娘、何をした」

王の形相が、無邪気な笑みが消え、憤怒が溜め込まれ――

……レメラは、小さな悲鳴を上げて逃げ出そうとして――

「なんだ、この騒ぎは！」

白い一団が乱入した。

――セラフィスの回想――

そのとき僕らは、丁度問題のある屋敷へ辿りついたところだった。

かつて凋落した貴族、その原因は邪教団へのかかわり、それに伴った、『不死法』を隠匿した疑い。

無論、不死――なんて言葉、

もはや夢幻想ではなく、単なる残酷な地獄でしかないことは、大人になった者には、理解できよう。

だが、望む――それは『死にたくない』と言う、誰だって持ちえる願いでしかない。老人になれば、それが顕著になる、といえば、それは子供な僕の偏見だろうか？

屋敷の周囲に現れる、不死者（アンデッド）――の話。

かつての邪法が暴かれたか、それとも新たに根城にした邪教団が現れたか――

そんな時、少女の悲鳴が屋敷から響いた。

「隊長ッ」

「うん、全員――」

旅装束で隠れ蓑をしていた僕らは、すぐに法衣に切り替わる。

本当は、秘匿捜査だったんだけど、問題ない。

問題は、目の前だ。

ローランとケルベクの二人が扉を開き、僕が飛び込むと――

――パンツがいた。

――――回想終了――――

体格の一番よい白い服の一団の人が叫び、白い服の少年が前に出る――

「僕らは教会の者です――一体何事ですか？」

よく見れば、衣服の朱が、他の人たちより若干、多い――この少年が隊長？

「失せろ――教会の犬。
我は今、そこな娘に――」

レメラはすでに――――逃げ？

吹き抜けの二階に駆け込んだレメラは、その吹き抜けから落下してきて。

「んなぁ！」

王様が素早く駆け込んで、レメラを抱きかかえたッ！

「な、なにごとぞ！　小娘――」
「……ひ、ひっく――ひっ――」
レメラの声は、まだ幼い童女のように怯えており――

「助けて！　姉さまぁぁぁぁぁ！」

助けは来なかった。
かわりに、恐怖がやってきた。

二階から飛び降りた、ワケが――ずるり、ずるり、と。

「不死者？　……しかもッ」
白い人たちが一斉に剣を抜く。
変な一団の人々も、物騒な武器や、おぞましい姿に変貌し――

「ま、魔物までッ！」
「違うッ！　彼らはあの裸の王の従者だ！」
おじ様が迅速に白い人たちに叫び、剣を抜き――
「あっ」
クリスは私の腕を掴んでその場から、白い人たちに向かって走り出す。

二階から降りてきたのは、死体でした。
全身がボロボロで、おぞましい中身を晒した、もしくは空っぽにした、死体が――
不意に、あの日死んだクリスのお父さんが――違う。そんなのとは違う――
震えてる、私――震えてる。
これ、怖いモノだ――

――――ｉｎｔｒｏｄｕｃｔｉｏｎ――――

ふたつ目の悲鳴があがった刹那――それは現れた。

シリアスな展開のはずだが、何故かここで突っ込みを入れたい。
さっきまで夕方だったはずなのに、暗雲が立ち込めて、背後には稲光で、ようやく容貌が露になるとか。
どれだけミステリーで重要かって印象を与えたいんだって雰囲気で、ぶっちゃけ登場。
ようやく登場――本編のヒーローキャラ、主役級だって言うキャラ。
なのに、メイン登場人物の描写ばっかで、人気はなんだかギルガメッシュに奪われっぱなし。
どうするよオイ？　って具合でようやく登場――
「ありゃ？　……レメラの？　じゃないな――」
その髪は漆黒――肌は白く、そして瞳は黒く――
まるで、黒曜石のように、黒い鏡のように――雷光を逆に照らし

出す。

「ふむ、眠い……」

両手にぶら下げた××××を引っさげて、彼女はやって来る。

第一級、災害指定魔族。本編の台風の目、ついでに言うなら引っ張りすぎ。

通称　Ａｓｒｉｅｌ。本名、ルルダ――

レメラの姉にして、蝶の異名を持つ人物。

【現世界最強】の【人間】。ようやく、読者（みなさま）を謎々へと導いていきます。

3【それでは、しばしの間、ご堪能下さいませ】

3【それでは、しばしの間、ご堪能下さいませ】

ガチリッ――

それは……

「ちぃ、お約束どおりに扉が閉まりやがった！」

すなわちそれは……

「この館、まだ生きてるってことかよ！」

……

まぁ、その通り。

彼らが居ないところの変化で言うなら、門前のガーゴイル像が、壊れたまま機能し、門を閉め――グワッシャン！

……

まぁ、門番なんかは本筋と違うから放っておいて。

さて、状況を語ってもらうのは――彼にしよう。

――クリス――

アリスの手を引いた後は、最悪が最悪に最悪した。

白い騎士団は扉の開閉を諦め、魔獣と人間のチームは勇猛にゾンビどもを蹴散らす。

ゾンビは奥から、二階から――このメインホールに寄って集って。

キリがない。

若干、勢いが弱まったと思ったら、連中――砕かれた頭以外の部

分を、他の死体から補強しあっていやがる。
なんだこいつらッ！
「知性のあるゾンビなんて、聞いた事ある？」
「ない。恐らく、改良ゾンビー」
白い一団の、年若い少年が大柄の男に訊ね――
「邪教団、居ると思う？」
「十中八九」
……とんでもない話になってきたな。
だいたい、何で今になって現れやがったんだ。
不意に――
「では、全部食べちゃいます」
……イタダキマス？
そして、闇が広がった。
全部、真っ暗だ。何も見え……る。
ただ、室内だけが、黒く、真っ黒に、漆黒に塗りつぶされて――
「……ゲップゥ」
黒い女性のはしたない声とともに、決着が付いたことを理解した。
黒が晴れる。あの女の人も、魔族――なんだろう。
「ご苦労、エンキドゥ」
「失礼あそばせました。陛下――いらぬ世話でございましたでしょうか？」
「否、我も片腕にコレをな――抱えていたしな」

と、レメラを片手で宙吊りに――エンキドゥと呼ばれた魔族の女性が、何か言おうとして――

「……助けてよ、姉さま」

「ん、登場遅れてすまんな」

……今、どこから声がした？

全員が、玲瓏なその声を耳にし、そして戦慄する。

メリィッッッ――

先ほどから乱暴に扱われていた扉が、その怒りに触れた音――なんかじゃ、ない。

爆炎ッッッ？――熱ッ！

アリスを庇って前に出て、その衝撃を受け――蝶？

僕の横をするりとぬけ――白い騎士団たちが一斉に、彼女を見やり――

僕は――絶望を知った。

僕の背後で――何かが立っている。

それだけなのに――何か、違う、死ぬ？　生きる？　違う、違う違う違う――

――――あ、アリスッッッッッ！

「姉さま！　遅いッッッ」

「しょうがないだろう。ややこしい買い物を選んだのはレミィ、お前のはずだろう」

……僕は、唖然となった。

皆、唖然となってた。

だって、そこに居るのは。

エプロンドレス、漆黒の髪、両腕には買い物籠――

どこから見たって、単なる村娘――

でも、違う。

旅人な僕ら――

冒険者である勇者連中――

白い騎士団の彼ら――

そのどちらにも属さぬ、全身黒の塊たる娘が――僕の背中に立っていて――

「あ、小僧――動けば殺すな。

こう見えて、ちょっと焦ってるんだ。

いやな、実の妹がああいう扱いされるとさ、ちょっと、いやかなりブチ切れると思わない？　思うよね？

その余波で死んじゃったら洒落にならないでしょ？　だからさ、少し大人しくね」

そう言って、離れた。

何だ、あの……威圧感。

「でだ、おっさん――言うだけ言ってみるけど、ウチの妹を離しな

さい」
「ほぉ、我に向かって、おっさんと――初めて言われたな」
「やっぱり、話の聞かない相手か」
僕は、注視し――何が起こったか理解した。
裸の王様が、吹き飛ばされ――片腕に吊るされたレメラは、今、彼女の右腕に吊るされて――
「ね、姉さまぁ～！」
レメラ、扱いに怒った。
「喋っていいのか？　私には通じないから別にいいけど」
「……ケチブス」
拳骨が飛んだ。良い音鳴ったな。

――――ッ？

「……我が、飛んだ？」
と、王様。仰臥した地面を背筋で蹴り、立ち上がり――
「ふん、今、何をした、娘――」
「……聞くけど、あんた何歳？」
彼女は質問を質問で返した。
「お、我の問いに答えろ！」
「嫌よ。最初に話聞かなかったのはそっちでしょ？　これでお相子よ」
僕の直感だが、彼女――良い性格してるな。
「ふ、ふざけおって……女、ただで済むと思うな」
「ただで済まないってことは、イヤ～ンなことでもするの？　それともHぃこと？」

場、唖然――

「ね、姉さま――Hいことって、何？」

「まだ貴女には早いわ。まぁ、今は話術戦（わじゅつせん）だから、合の手入れないで」

僕にだけ聞えた、こっそり話。

なんだ、この人……

「……されたいのか？　されたいのか？　ん」

エロい顔してます。男って本当最低……

「　陛　下　？　」

おっと、ここで黒い女性が陛下の腕を捻り上げ――うわぁ……（これ以上の表現は以下略

「……と、とにかく！　我に手を上げたと言うことは、即ち、王に逆らう――」

「やれやれ……眠いってのに」

「こら貴様！　人の話は聞けと、母親に習わなかったか」

「私たちに、母はいない」

不意に、彼女の声が凍った――

刹那――

「では、我がパパンになってやろう。彼女がママだ」

「となると、私はプリンセスか――似合わんな」

「あ、私もお姫、お姫～」

「レミィはちびこ過ぎる。だいたい白馬の王子様がアレでは、私は

硝子の靴を捨てて逃げるぞ」

……えぇ～、これは、なんて漫画ですか？

「……えっと、お互い落ち着いたなら、話し合えませんか」

と、二人の間にわって、灰銀髪（アッシュ）の少年が割り込む。

あの騎士団の隊長らしき、いや恐らく隊長の少年が――ようやく話をまとめようとして。

『話し合えるかッ！』

きっぱり否定された！

「えぇぇぇ！　ちょっと、二人ほのぼの和んでませんでした？」

狼狽する少年隊長に――

「ほのぼの？　ふざけるな――この筋肉マッチョボーイにほのぼの出来る要素があると？　あるのは露出狂と変態臭だけだ」

「何を言う、そこの真っ黒クロ子！　貴様こそダブル買い物籠で、エプロン姿なのに、カチューシャはどうした！　メイドの分際で」

「私はメイドではない。あと、メイドは私の中で世界で大嫌いベスト1にランキングする最低劣種の存在だ。

そんな下等生物と、私を一緒に並べるな」

『待ったぁぁぁぁぁ！　メイド嫌いには意義があるぅぅぅ！！！』

なんか上文（センテンス）、白騎士やサーカス一団、ついでにアリス！　キミまで！　一致団結して叫んでいるんだけど！

全員が全員、「メイドは宝だ」「メイドの癒しをしれ！」「家に帰ったときの『旦那様、お帰りなさいませ』に癒されろ！」とか崇高だの神だの、的外れた意見が次々――なんだこの空間……

か、帰りてぇ……

「……貴様、メイドのありがたみを、否定すると言うのか」
さすが王様、メイドを嗜んでらっしゃいますか。後ろの黒い人がすごい睨んでますよ？

「私には、ヒトと触れ合う機会がないだけだ。
在るとしたら、いつも戦場の――敵、敵、敵、敵ばかり――」

彼女は――僕とアリスの方にレメラを寄越す。……へ？

『あ～ぁ、知らない』
と、空を描く文字――

レメラは、笑っていた。

残酷に――

『……死んじゃえ、肉達磨』

書きかけて、消えた。

「我は勇者王――ギルガメッシュ！　覚悟せよ、娘ッ！」
「――ルルダ。ちまたの戦士にはこう呼ばれた――」

Ａｓｒｉｅｌ――生死を分かつ天使。

「――では、絶殺を開始する――」

……なんでこんなことになったんだか。

わからなくもないが。

あの手の連中は、【戦い狂い（バーサーカー）】と言うか、荒事で何でも片付けるのが大好きな類だ。

レメラの言った、『凶悪』と言う意味がわかったが――

僕はまだ、彼女の一部を、いやただ断片しか見ていないと言うことに、気付いていなかった。

4【では、召し上がれ】

4【では、召し上がれ】

俺は親父に散々、仕込まれた。
一番に、【逃げる】こと。これはどんな戦いであろうと【生き残れば勝ち】と言う理屈からである。

では、【理屈のない戦い】ではどうか。
無論、相手を打ち負かす――で綺麗な解答。
むしろ、理屈や理論のないやり取りなんて、幾らでもある。
喧嘩――戦いなんて最たるものだ。

理屈も秩序も理性も何もない――ただただ純粋に、【どちらが強いか？】。
ただそれを決めるだけの戦い。

戦い――

闘い――

親父譲りで、色々やられたり、見てきたはずなんだけどなぁ――

甘かった。

もう、メインホールは使い物にならない。
これは、喧嘩じゃない、戦いじゃない、

【戦争】だ――

子供の胴回りはある鉄拳を、アズリエルは交わさない。
受けもしない。だが、絡め取る――

武術にない、体術ですらない、全身を紙切れのように包み込んで――さながら、全身を、蝶の翅のように広げ、包み、

……喰らう。

包まれた腕から流れるような、斬戟――だが、得物が見えない。
いや、あるか――

ギルガメッシュが気付く頃には、全身を這う無数の鮮血と――手を血に染めるアズリエル。
なるほど、蝶の異名はこのことか……まさしく、『華蝶舞蝶』。

人の手に生えた、小さな凶器――少し伸びただけの爪。
それが、彼女の得物――

壁ごと貫く蹴りには、――っつか、んな荒業初めて見たよ。
――突き刺さった足の上に、アズリエルは片足で突っ立っていた！

「……坊や、感心しないね。周りの物事破壊するのは、少なくとも綺麗ではない」
「抜かすな！　我が御手に触れられればこそ、品物とて本懐であろう！　あと、我の足に気安く立つな！」

やはり、無理矢理壁ごと振り払うが――同時に顔面に蹴りを叩き込まれるギルガメッシュ。

再び地に背をつけたのは、またしても彼だった。

いや、たぶん――ギルガメッシュの無差別な破壊は、考えてのことだろう。

あんな攻撃、まともな神経がなくっても、喰らえばひとたまりどころか、内臓はみだすんじゃないか？

圧倒的な力差は、それだけで相手の意思を削ぐ。

それだけ相手を惹きつけもする。

恐らくは、ギルガメッシュ王に付き従っている者たちも、そういった彼の力に魅了された者たちではないか？

先ほどからメインホールを意味なく破壊しつくしているのは、ギルガメッシュ一人で、

アズリエルはと言うと、ずっと彼の相手をしている――といった具合。

また背筋で立ち上がる――アズリエルは正面で腕を組んで、あくびをかいている。

これは――なんてマイナーな屈辱だ。

多分、彼女はワザとやってる。しかも、わかってて激昂する王も王だ。

「あ、あのお姉さん、すんごぉ～い」

『姉は何でもできるんのが強みですから』

アリスと、レメラ――

『趣味は読書と散歩で――好きな男性のタイプはお兄さん系。
最近は誰か想い人でもいるんだか、たまにああやって人間界に下っては、買い物と散歩と――男漁りを』
「そこ、デマ振り撒かないッ！」

――卵が飛んできたぁぁぁぁぁ！（ご丁寧に生卵！）

って、アズリエル、買い物籠――どっから出したの。

「小娘ぇ！　余所見をするなぁ！」
「嫌。だって眠いし」

背中を向けながら、拳を避け、蹴りを半身を引いてかわし――どれだけ感覚神経が鋭いんだ。
あるいは、絶対の自信があるのだか――

「もう飽きたし」
「なにぃ！」
「私が気になっているのは――その『傲慢』っぷり」

鋼を砕く拳が――――え……

「だいたいさぁ～。何よ、このインスタントヒーローっぷり。規格外筋肉とかどれだけ稚拙な設定なのよ」
拳が――止められてる。
「ただ、それゆえに――強大過ぎる力が故に、有効有益文句なし。ハッ――喧嘩相手にしちゃ申し分はないわね、けどね――王様」
王のもう片方の一撃――入っ――！？
「――――ッッッ！」

「王といえと、相応の力と苦節と努力はあれど――私は気に食わない」

文句無い。顔面に入った。女相手なのに――という一文を無視した、完全一本――

「う、うっそぉ」

素っ頓狂な声は――あの灰銀髪（アッシュ）の少年。――ん？　何人か兵士の数が減っている。

「私は、気に食わない。その力を持ってして、その心根には力なし――その過信が、どれだけの負を生むか」

顔面に拳を叩き込まれてなお、アズリエルの言葉は止まらない――

「王！　彼女は魔術師だ！　魔術障壁――違うッ」

灰銀髪が叫び――理解した。

王が飛びのこうとして――蝶は舞った。

「気が変わりました。貴方に【絶望】を与えます――貴方は【無力】を知らなさ過ぎる」

力あるが故に、無力を知らず――

「それが、貴方を【王】に至らしめるなら、お姉さんが叩き込んであげましょう。無力な【人間】を」

ギルガメッシュの顔面を、両手で挟み――

グワッシャ――

「く、空中――地球投げッ！」

あの巨漢を、まるで大根を引き抜くように、空中で引き抜き――
顔面から後ろに叩き落す――な、なんだよあの力技ッ！
「ね？　非力な私でも、あなた程度の巨漢を投げられるでしょう？」
顔面から床に突っ込んだ王に、返事は無い。

臣下たちが次々に彼女への敵意と畏怖を高める。
が、その中央で誰よりも王を見守る――黒い女王が――

アズリエルが、その王妃を見据える。

「……何か？」
「別に――」

『……そうなのよ。あの筋肉達磨はいいのよ。問題はアッチの女』
と、小さく文字を躍らせる。アリスは小首を傾げ、
『あの女の方は、純粋無欠の魔族――人間の天敵なのよ』
「へっ――でも、さっきゾンビさんを」
『あれはゾンビを食べたのよ。文字通り――
雑食どうのこうのじゃなくって、あの力――無差別に何でも出来る
って言うのは、力でもなんでもないわ』
「よくないんですか？」
『フェアじゃないのよ』
「よく言うよ。そっちは人類規格外の姉貴がいるくせに」
『あら？　姉さんはれっきとした人よ。人間かどうかは知らないけ
ど――人一倍怖がりだし、臆病だし――ただ』

勇敢なだけなの――

と記される前に、ギルガメッシュがアズリエルを掴みあげた。
「女ぁぁぁぁぁ！　賞賛に、絶賛に値する！　我をここまで痛めつけ、屈辱に陥れたのは、お前が始めてだぁぁぁぁぁ！」
「……」
頚椎――ようするに首を絞められて、声が出るわけが無い。
だが、表情に苦痛は無い――むしろ、冷めている。
「お前が何を思ったか、当ててやろう！　まるで敗北寸前の悪党の台詞だと！」
え？　王様――頭いいのか？　っつか、正解？
「だいたいお前のカラクリは読めたわ！　無重力化の拳法が存在すると言うが、それだな！」
『せ、正解ッ』
焦った筆で、レメラが――
「加えて、あの小僧にも救われたが、風の魔術だな！
顔面部は脳を守る頭蓋がある、あれを綺麗に打ち抜いたのなら、脳が完全にいかれるわ！
あの風は、『衝撃を貫通させたように思わせる』特殊な風術！
芸が細かいが、そんな格闘術者だったら十はしとめてきた！」
レメラが灰銀髪の少年を睨み、少年がそれを罰の悪そうにそむける。
「さらに、あの妹――あの目隠し――アレはただのお洒落ではなぁい！
おそらく、汝らの何かの行動能力の制限。
――貴様の顔にも目元に何かを巻いた跡が、残っているわぁぁぁ」

そして、これにはレメラが自分のアイマスクを抑えて、いや顔を覆って凍りつく。

そして、この喋っている間にも、アズリエルの頚椎は締め付けられて――

「賞賛、否――絶賛しよう。我をここまで陥れた女ぁ――選べ、我を王と尊び、跪くか――この場で魔として葬られるか！」

つっ――と、レメラが、前に出ようとし――止まった。

「ね、姉さん……」

あ”……？

「あ”……」

王様、完全にブチ切れたな。

俺たちも、何だか一気に萎えたよ。

「ＺＺＺ～～～」

アズリエルは、首絞められながら、寝てやがった。

5【居心地はどうでございましょう？】

5【居心地はどうでございましょう？】

バトル物が始まっているところを悪いけど、僕らには僕らの仕事がある。

「ローラン、ケルベク」
ウチのチームで屈強な戦士二人を呼び寄せ、
「三人、いや五人一組……二チームでいいかな――この隙に他のソンビーがいないか調べておいて。
奴らが現れたら、極力戦わず、出来る限りの排除でいい。危なくなったらここへ戻る」
『了解』
「彼らをあてにしちゃう形だけど――戦力に申し分ないしね。僕らは人間だし」
「了解しました。隊長」
（この潔さと、状況判断――血の繋がらないのに、どこまで似てくるのやら……）
「……な、何？　ローラン」
気持ち悪いなぁ――
「いえ、了解いたしました。シャット、サヴィン、それとルージュとウェイバー、お前らは私に」
「では、ムディラとアギトにゾルガ……それとディラン、行きましょう」

それが、始まって直後の会話――
少しして、裸の王がアズリエルを吊るし上げる光景が――

刹那――直感と言う感覚は本当に刹那だ。
一瞬だとか、紙一重とか――そんな厚さではない。
本当に経験と連続とそれに慣れた僕の思考の、一瞬――いやもはや無瞬の間に。
それが現れた。
『危ねぇ！　ギルッ』
裸の王が飛び退き、その場に一振りの刃が――あ、アレって――
「……ま、魔剣」
違う――なんだ、この気持ちの悪さ――魔剣だからって気持ち悪さじゃない。
魔剣だったら僕だって、禍々しい魔剣を何本も仕事で処理してきた。
なんだよ、この既知感。
「ほぉ、まだ隠し手があるではないか」
ギルガメッシュ王は――気づいてない。
嗚呼、そうさそうさ――これは僕だけが気づける。でも待って――どうして！
アズリエルは――眠ってる。
何で眠っている。皆馬鹿みたいに固まっているけど――僕は思わず叫びそうに――
『なぁに寝くさってやがる馬鹿姉貴』

僕の代弁を、代筆――
アズリエルの……？　妹？
妹君は大振りで蹴りあげたのだが、寝返りでそれを軽く交わすアズリエル。
……あの反射神経――馬鹿みたいだけど、僕は戦慄する。
「……だぁ～って、……眠い」
『何？　昨日は大人が夜中に、子供には内緒って内容なコトでもしてて眠いっていうの！』
「駄目よ！　レメラ！　まだその内容をアナタが理解するには早すぎるわ！」

即起床――

「隊長、私的進言ですが、少し奥で休憩なされては？　そ、その……まだ隊長にはお早いかと」
「馬鹿げた理由で口出すな。皆、こんなの洒落じゃすまないって気づいてねぇんだから」
裏僕が容赦なく顔だしても、お構いなし――
後ろで隊長が大人になったぁ～　とほざいた連中、あとで減俸……
生きて帰れたらな、畜生――

――――――――――――

「やれやれ、わ～ったわよ。レメラの要望だから、相手してあげっけど――」
アズリエルはそう言って、突き刺さった剣を片手で引き抜き、肩

にたたく。

対して――ギルガメッシュの傍には、浮遊する長剣（見た目短剣）……エクスカリバー。

『……ま、魔剣グラム？』

「ふん、お前の兄貴筋か――怖気づいたか？」

『馬鹿言え――だが、所有者は竜殺しの魔勇者（イービル・ヒーロー）じゃなかったのかよ』

その言葉はアズリエルに届いたのか――彼女は、手元に黒い手ぬぐいを持ち出し、

そして、ギルガメッシュの予言したように、レメラと同じく、目元に巻いた。

「さってねぇ。色々殺したりはして来たから、あんまり覚えてないわ」

「はっ、今まで縁のあった男は皆殺しか――」

「……アンタ、私と妹の会話聞いてなかったわね。

私、処女だよ。年若い世代には嬉しい設定じゃない？」

バンダナを目元に巻き終えた彼女を、黒い羽織が包みあげる――

これで、素肌以外、黒一色。

「やれやれ、仕事着きると気分変わるわね。やる気出るわ」

『姉さんはいつだってやる気〜〜あでぇ！』

背後の妹に、文字も見ず、と言うか見えていないのに剣の腹で頭をたたくこの姉。

セラフィスの戦慄が、そろそろ周りにも感化してきた。

「んじゃ、続きと行くか」
「いいえ、もう終わっているわ」
そして――
（嗚呼、気持ち悪いわけだよ――あの魔剣――僕と同じ――
自分で作り描く武器だ――）
創造で生み出された、無数の魔剣、聖剣、邪剣、ナイフ、棍棒、斧、鉄棒――槍が――
ギルガメッシュに――
「きかんッ！」
降り注いだ――のに、全部ッ！　叩き落した！
魔剣、聖剣の腹をこぶしで叩き落し、切っ先にはエクスカリバーが残像を残して、ひとりでに舞う。
降り注ぐ刃物が雨なら、さながら肉の台風――
無論、無傷で済むはずもなく――多少の鮮血が舞うが、この王にその程度は、かすり傷にすら――
甲高い爆発音――巨躯が、堕ちる。
「いや、アンタならそれやると思ったから、こう言うのも作っててね」
魔剣が握られていた手には、まるで黒衣から生まれたような黒金

の――ボルトアクション式、自動拳銃。
幻想世界における、禁忌――
「あらら、アナタがヒーローなら。ここで弾丸もはじき返すんだけどね」
崩れた英雄に降り注ぐ、雨――
無数の聖剣、魔剣たちと――そこに横たわる巨漢。
「それとも、ヒーローだから――仲間に助けられて、今を生きる、かしら？」
その巨漢を覆う――闇と、人影。
「余計なお世話でございましたか？　我が君」
「ふん、お前の情けがいつも世話以上のコトでないと動かないのは、我がよう知っている」
「あらら。とんだお節介でございましたね」
「よい。我の妻だから」
闇の中から仲睦まじく――現れる、王と王妃。
切っ先から先すべてが、闇――黒い霧に包まれて、先端は消滅。
闇にはじかれた魔剣たちは次々に形を失い、その上を王と王妃が並んで歩く。
「何、あのバカップルっぷり」
「それより、その術――単なる武器生成ではないようですが？」
そのバカの片割れ――エンキドゥ王妃の瞳が斜に構える。

「嗚呼――アタシの能力……何個かある中の何個か目。一度見た武器は自分で生み出して使えるんだ」
「天然の錬金術師？」
「ちょっと違うかな――だって見た物は武術、技、何でも記憶しちゃうし」

頭を掻きながら、アズリエルの視界は――
（嗚呼、痛いなぁ――）

――無限に広がっていた――

（こんな無様な設定、誰が考えやがったんだ畜生）
君の兄貴です。

その視界は、熱を寒暖の色彩に分けた世界から――
臭気――嗅覚を視覚化し、具体的形成をなした世界――
この世界に広がる『魔』力の流れ――

何より――その、全てが――人の脳では処理しきれない刺激を――
（嗚呼、面倒くさいなぁ）
この一言で、中断していた。

（……説明すっとややこしいのよねぇ。
目覚めたら、世界は紅い色でした？　別に血とか戦火で真っ赤だったわけじゃないんだよ～。
自分の血かな――）

おそらく、人体の処理能力を超えた理解が、脳を圧迫していたか――

それを私は、諦めた。理解しきれない理性では――どうせ理解し終えない。

だから、本能に任せた――

だから、最初は瞳を奪おうとした――

最初の記憶は、目を開けたときの記憶。
真っ黒だった。
真っ暗だった。
目に手を当ててみた。

布があった。
すべての光を遮断する、手ぬぐい、バンダナ――

血染めの、どす黒くなったバンダナ。

懐かしい、誰かのにおいがした。その人の、血だろうか？

すぐに姉が現れ、彼女たちは姉妹になった。
姉はすぐにアズのバンダナを咎めたが、やがて同じように真似。
妹も似たような症状を持って生まれ、新たなバンダナを仕入れた。

姉妹で分け合った、鮮血。
ともに生きようと誓った娘たち――
当てのない世界の果てで――

（やれやれ――可愛い妹のため――一肌脱ぎますか）
『おう、頑張れ――』

――ッ！？

「……兄さん？」

一瞬、アズリエルが玄関扉を振り返り――

「誰かおりまして？」

暗闇がすべてを支配する――

（……多分、あの娘は――人間であってそう、でない何か――）

エンキドゥの視界に移る、黒衣の娘――

骨格、肢体、構成物質――それらにおいて、彼女は人間だと断定できる。

だが、異常――

人体における、最高級の肉、骨、構成――魔力、体力、エネルギー……

それらが、すべて、最高――ゆえに、異常――

（どこまで鍛え続ければ、これほどまでの人間を生み出せるのか……）

人体の限界――そのギリギリまでに引き抑えた筋肉にして、壊れないまでに整えられた構成――

壊れにくい、倒れにくい、殺しにくい――

単純なことだが、それが何を意味するのか――

（それはすなわち、持久戦――）

無論、圧倒的な力をもってしてなら、壊れないものはない。

現にそれを体現してきたのが、彼女の仕える王――ギルガメッシュなのだから。

だが、真逆に、その否定を体現させたのも、また彼女。
王との戦闘では、最悪の相性と言わざるを得ない。

さながら、グーとパーの戦い。柔と剛――

剛――エンキドゥは自らの主（あるじ）を一瞥する。
独りぼっちの孤独から救い出してくれた、孤独な王。
たった一人で闘ってきた、少年王。

自分を、愛してくれた――最愛の人。

彼に、刃が降り注いだ瞬間は、覚えていない。ただ、自分しかできないとは悟った。
それほどまで、あの娘の能力は異端。

エンキドゥの力が『全てを飲み込む』なら、彼女――アズリエルは『全てを超越する』……だろうか。

……ギルガメッシュは、彼女に殺される――

迷いは、その一瞬で吹き飛んだ。

（全てを、喰らう）

まずは、彼女そのものを――もし、何らかの手段で回避するなら、

好ましくはないが――あの妹を。
闇が、アズリエルを喰らう――
弾けた銀色の凶弾が、妹君の足元に――それをさらに暗い触手で弾く。
本能的にこれが危険なのは、飲み込んだ際に理解した。
王が何か言いかけたが、止めなかった――後でお叱りを受けるだろう。それもまた私の楽しみだ。
王に叱られるなど、滅多にないのだから――
「さきに白状しておくわ。私が一番怖かったのは貴女――」
……
闇が囁いた。
「別に規格外筋肉だろうが、聖職者のベテランだろうが、元騎士だったらそれでよかったのよ。
でも、貴女は別。
貴女は強いでも弱いでもない。私と同じ――『無差別』なのよ」
無差別――
能力的に、規格外――
生まれてきた生命として、規格外――
その戦闘能力が、規格外――
何もかも、無差別に――駆逐できる――規格。
（……どこッ？）
「その男のためになら、貴女は何でもする。それは――許せないし、

私が怖い」

（どこよッ！）

「貴女――今、私の妹を傷つけようとしたわね？」

（どこッ――）

（貴女の中よ）

誰もが眼を見張った。

理解できなかったからだ。

エンキドゥが空間を丸ごと、闇で包んだかと思えば――アズリエルが一瞬で闇に飲み込まれ――

エンキドゥの背中から、アズリエルが生えていた――

「王には絶望を、魔族の貴女には痛みを――」

S級災害指定魔族――通称『混沌（カオス）』。

「アズリエルの名のもとに――下します」

その最後は、無残な斬殺死体となって、冷たい床に落ちる――

5【居心地はどうでございましょう？】（後書き）

うぅ～～～ん　この展開は考えてはいたんだけど、二話に分けた方がよかったかなぁ…

本題ミステリだから、とっととバトル終わらせたかったんだけど……

まぁ、いいや。

本日は雪が降って積もって綺麗だった（―＿―

6【どうぞごゆるりと……お休みください】

「――絶望を――痛みを」

……何が、どうなってやがるんだ。

あの黒いお姉ちゃんの背中から、あ、アズリエルが、生えている――

君の悪い光景に、思わずアリスを抱きかかえて眼を伏せさせた。

アリスも体を縮めていたので容易かった。

何より、あの体位は――

絶対殺害確定状態（キル・ポジション）。

「……下します」

……あ……

嗚呼……

やっちまいやがった――

赤、紅、アカ、――

鉄錆びた、匂い――

誰かの死ぬ匂い――

なんだ、魔族も人も、死ぬのは、同じなんだ――

「……なっ――」

王が、背後で起こった事態に、硬直――

「な、ぜ――」

「たいした事じゃないわ。混沌に実体が無いなら、実体に混沌を押し込めばいいだけじゃない」

何事も無かったように、眠たげな声のまま――アズリエルは告げる。

「だから、水を殴って駄目なら。器に入れて殴っちゃえって暴論よ。単なる水だったら零れるだけだけど――どう？　人間の体の痛みは？」

――人――間？

人間――

「なまじ、混沌なんて不定形、実体無しの化け物なんて、たいてい肉の体に押し込まれたら――」

「ま、まさか貴女！　『人間の体を創造』したって言うんですかッッッ！」

白い騎士の少年隊長が、全霊を込めた雄たけびを――あげる。

「そうよ、坊や。何かおかしい？」

「不可能だ！　物質や精霊の媒介ならまだしも――生きた人間を形成なんて――」

「できるんだから良いじゃない。それに、生きた精神だったら――造るまでも無いし。

あくまで痛みを与えるための器――でいいんだから。

精神体の化け物なんてね、なまじ痛みを知らないものだから――」

倒れた女王をあくびをかみ殺しながら見下ろし、アズリエルは告げる。

「……こんなあっさり死んじゃうし」

「貴様ぁぁぁぁぁ！　万死に値すッ――」

「あたしが万回死ぬ間に、貴方は無限に殺され続ける」

怒り狂った王――絶望を拳に乗せた王は――

――腕を切り落とされた。

「私、あんまり自分の武器や技に名前を付ける主義じゃないの。小説みたいに馬鹿みたいに名前なんてつけるものじゃないわ。現実の殺し合いで、自分の技を叫ぶ余裕はおろか、教えるなんて、私にはそんな自信はないわ。」

また、武器を――今度は黒衣の下から、長柄の刃を生み出して――

「でもね、伝統は重んじるべきでもあるのよ。武術ってのは人が生み出した文化でもあるのだから。

だから教えてあげる。今のは抜刀術――本当は心臓部に掛けて、人体の動脈に添っての抜刀――

……名を、【血桜（ちざくら）】――」

たしかに、血桜――に相応しい。

舞い散った花びらが、アズリエルを彩る――

肘から先を失った王は――

「え、エクスカリバー！」

『――あぁ！』

愛剣を残った腕で振り払う――初めて王が剣を使い、その刃から光が――

「抜刀術は振り抜いた後の余韻が隙となる。故に――返し剣」

アズリエルはそれに、回転で答えた――

振り抜いた刃を――その勢いのまま片足を軸で回転し、

「邪剣術になるわね。これは武術には及ばないわ――」

エクスカリバーの聖光を、血塗られた刃が叩き飛ばす――

「単なる大振り」

いや、彼女の勝ちか――エクスカリバーは音こそ立てないが――刃先から刃筋まで、すべてがボロボロに砕かれ、

アズリエルの刃は、中心から折れてしまった。

自然、当然の結果。

――勝敗は決した――

刃筋の無くなったエクスカリバーは彼方へ、

半ば折れた剣の、折れた先を王の首へ――刃はまだ、死んでいない。

「わかった？　坊や」

……いか、……へいか――

微かな響き――

首筋の刃を気にも留めず、王は駆け出した。

愛する人の――愛した魔族の下へ――

アズリエルは、ただ眠そうにそれを見送っていた。

『わざと？』

「うん――」

レメラの文字に、アズリエルはやはり眠そうに頷く。

「エンキドゥ！　エンキドゥッッ」

「あはっ……陛下……召し物が、汚れてしまいま……」

「我は裸だ。腰物など、お前の血でなら本懐であろう――」

「あはっ……陛下、ご、ごめんなさい――」

「何を謝るかっ！　お前は、お前は……誰よりも、我に仕えてくれた……」

巨漢の少年は涙で顔をくしゃくしゃにし、

魔族の娘は全身を引き裂かれたまま、囁く――

……僕は、俺は――

それを、とても痛く苦しいと思った――

見ていられない。でも、見届けなきゃいけない――

そんな、使命感めいた、何かが――僕にあった。

父さんのときとは、違う。

だが――その使命は一瞬で終わった。
終わったあとに、瞬きの時間すらない――

――せっかく、人になれたのに――
――陛下の子供、生みたかっ……――

……耳に、焼きついた。
続いたのは、号泣――

館内を震撼させる大男の泣き声に触発されるかのように――

7【では、お悩みください】

7【では、お悩みください】

怒号が響いたそのとき、それが現れた。
セラフィスに命じられたケルベクら五人の前に、蒼い髪の少女が――

「……子供？」
と、疑問を持ったのは一瞬、
危機感を覚えたのは刹那――

だが、少女が動いたのは、『無瞬』

「誰？　お兄様を殺した人は？」
ツインテールが軌道を描いた尾を引き、彼女が動いたことを教えた。
もっとも、頚椎が握りつぶされており、ケルベク自身は気づけなかったのだが。

「け、ケルベク」
その蒼い少女は、大柄な男を片手でつかみ上げ、放り投げると――

「コレじゃない。兄様を殺した化け物は」
狭い廊下での遭遇ゆえに、ケルベクの体は窓を破り外へ打ち捨てられ、
「どこ？　兄様を殺した、糞ガキはッッッ！」

「うっさいわね――」
号泣を遮る――静謐な、眠そうな声。
初めて、アズリエルが感情を出したような気がした。
……気の、せい？

「別に人が死ぬのは初めてじゃないでしょう。貴方にも何体か、恨みがましい気配が漂ってるし」
「……黙れ」
「いいえ黙らない。この世界に勝者と敗者の二択しかないなら、貴方は間違いなく後者。私が前者。そうでしょう？」
「ならば、今この場で殺してくれよう！」
残った左腕がアズリエルをくびり殺そうと伸びるが、彼女の方が上手い。
その腕を軸に滑り込んで、王の背中を軽く蹴るだけで、王はあっさりと前につんのめり――
アズリエルは、王妃の亡骸を――自分が作り出した、人の形した魔族を見据え――

僕の勘が正しければ、アズリエルは、
嫌な顔をしてたんじゃないかな？

「……ったく、わっかんないわねぇ」
アズリエルは、右手に王の切り離した腕を――
「人間（こんなニクタイ）の、どこがいいんだか」

王妃の胸元に、ポンと放る。

同時に――人の形が壊れ、王妃の、本来の【闇】が広がる。
広がった闇は、そして一瞬にして、血色の魔方陣を描き上げ――

「な、何をしたぁぁぁ！」
『動くな！
姉さま　を傷つける　なぁぁぁ！』

王はまるで、壊れた人形のように前のめりに倒れた。

「……レメラ、私以外に喋りはしないんじゃ？」
「姉さんこそ――何をやっているんです？」
「感傷のままに行動しただけ」

黒衣の姉妹は二人だけで言葉を交し合うと――

妹のほうが嘆息を零す。

「姉さま――いずれ殺されちゃいますよ」
「それも一興――」

二人は何事もなかったように、玄関へ向かい――
魔物の群れと遭遇した。

「待たれよ」
「このまま逃がすと」
『邪魔――消え』
「消したら駄目」
『じゃあ、寝てなさい！』

魔物の群れが、いっせいに崩れ落ちた。
「さ、さきほどの馬頭鬼とケットを落とした技ですか」

射程圏外――と思しき場所にいた、チキン――王の側近は、しかし膝を折り――
『…貴方だけ、残しました。さっきのゾンビーに皆さん食べられたら、後味が悪いでしょう？』
レメラは再び筆談に戻ると――アズリエルの腕の中に逃げ――
「これ以上、妹を傷つけるなら、全員ゾンビの餌にしてやる」
それだけ言い放つと、玄関を蹴り壊して――

そして、物語から、一時退出する。

――――――――

……夢、を見たんだと思う。
だって、あれだけいた魔物たちが、ほぼ昏倒――
あの、アズリエルって女が背後に立つだけでも恐怖だったのに、一緒にいた――あのレメラって娘だって、何者かには違いなかった。
……でも、いまだに何者なんだ？
ただ喋るだけで相手を無力化する――
だから筆談……なんだろうけど。

「……あ、クリス？　玄関」
……あっ？　そうだった。
ぼ～っとしてしまったけど、アズリエルたちがぶっ壊してくれた玄関のお陰で――脱出はできるんだ。
こんな場所、さっさとおさらばしてしまおう。

「アリス、おじさん」
「そうだな――ここは危険だ」
「そうですね。そちら方は脱出を――もし、帝国領に行かれるのでしたら」
「目的地はそちらと同じだ。教会に言伝いたそう」
「感謝します……将軍」
灰銀髪（アッシュ）の彼が、片腕のおじさんをそう呼ぶと――おじさんは少し驚いた後、僕とアリスを促し――

落とし穴にはまった。

「な、なんでここでベタな！」
灰銀髪（アッシュ）の彼が、泣きそうな声で、僕の隣で叫んだ――
僕は、一瞬だけ――床の隙間に気づき――足踏みして助かった。
が――
「おっさん！　アリスッッッ！」
ま、不味い不味い不味い不味い不味い――
暗くてよく見えないが、悪くて下はゾンビーの群れ――
「飛び降ります。隊長――許可を！」
「三……いや五人一組で彼らを保護！　ジョン、ユーイ、カインとジューディはメティが続いて！」
『了解ッ！』
「……あとは、俺たち五人だけですか」

「ローランたちが戻るまでの辛抱さ……？　……」

俺は――とことん阿呆だな……

気がついたら、騎士団が動く前に飛び降りようとして――

「ローランって、コレ？」

……あん？

目の前に転がった――生首。

だが、それがどうした。

「け、ケルベクッ！」

ツインテールを靡かせた小娘に、俺は殴りかかっていた。

――――――――

あいたたたた……

「……くぅ、それほど――深くは落ちてない筈だが」

お、おじ様が下敷きになってくれたお陰で――なんとか。

暗くて良く判らないけど――

……ピチャリ。

頭に何かがこぼれて来た。

なぜだか判らないけど、血だってわかった――

――――――――

「……あッ」
「どうした、レミィ」
「アリスちゃんたち忘れてきちゃった！」
「アリス？　……先ほどの小娘たちか？」
「うん、友達になったの――」

廃墟の庭園――並び歩く黒衣の姉妹は廃屋を立ち去ろうとして、
「阿呆。二人は感情に流され安すぎる」
「姉さん――」
「でも、ルル姉は感情をなくすととことん、残虐になるから嫌」
「肯定。ルルはもう少し、自己を確立すればいいと思う」

三人目の黒衣と合流した。

同じ漆黒だが、こちらは旅装束の、襤褸いローブをまとった妙齢の女性。
アズリエル…ルルダは黒衣を脱ぎ払うと、いつものエプロンドレスに戻り――
「はい姉さん。頼まれていた買い物」
「感謝。あと、なぜメイド服に戻る」
「これは家事専用作業着です。なんでもメイドメイドと呼ぶのは感心できません。社会の風潮に流されすぎです」
「嘆息。私が聞きたいのはメイド云々ではなく、あの館に戻らないのかと。戦う気はないのか？」
「私、喧嘩と殺し合いは好きじゃないんです。一方的な虐殺ほど、

反吐がでるものはありません」

「然様。それは知っている。だが現に――お前に並ぶ実力者が、あの館におったのだぞ？」

黒衣の姉君が、黒髪を風に靡かせ――告げる。

「あの洋館の中で、もっとも血臭の多い人間――お前に匹敵する【最強】であったぞえ？」

（……姉さんが、二文字、四文字、の枕詞を使わなかったわ）

三女のレメラが、物珍しげに長女の顔を覗き込む。

とても楽しそうな笑みを、久々に拝んでしまった。

7【では、お悩みください】（後書き）

すいません、だいぶ更新滞りまして…
単に、仕事と遊び（マテ　と仕事とスランプ（痛切　と初音ミク（ぁ　と色々やらかしたら、収集つかなくなってしまったしだいです、はいＯＴＬ

ボツボツ更新していくつもりが、前回のようにズダ～っと一気に書いちゃったり、こんな風にズタボロ長く…今回は酷かったなＯＴＬ

うん、とりあえず、再開！　だが、文字数少ない…
……ずだぁ～っと行くか――

8【謎々はまだまだ続きます】

8【謎々はまだまだ続きます】

それは、たしかに【邪教団】と呼ばれるには、間違いなかった。
【不老不死】。それは人間の叶わぬ望みのひとつではないか？
【絶対たる力】。それは決して叶わない、すべてを意のままに操る、【絶対】。

どちらも漠然として、具体的なソレ、とは指し示すことは不可能だが――

それを目指すことは、可能だ。

彼らにとっては、ただそれだけだった。
そして、少女の【兄】はその、漠然としたその中の一点、ただ一点だけを望んでいた。

【永遠】――これもまた、然り。
叶わぬ願い、叶わない思い、叶えてはならない不自然。

だが――【人】は【不自然】を叶えてしまう。
歪んだ代価を伴って――

「……くふぅ、また――壊しちゃった」
歪んだ代価を伴って――

そのツインテールの少女は、独特な蒼い髪をなびかせた、傍目清楚な娘である。

今しがたまで生きていた、人や魔物の鮮血さえ帯びていなければ――

「でも、まだ壊していない」

邪魔した魔物やならず者――そしてあの少年がいなければ、灰銀（アッシュ）髪の青年を殺せたのに。

――地下大聖堂――

「……問題は？」

「あるまいて――あの蒼き娘が始末してくれよう」

闇に浮かぶほの赤い灯火に浮かぶ、六対の黒き姿。

どの人物も年相応の年代を重ねた人物であることは、声音で容易に想像つく。

が――伸ばされた手は年若く、張りと艶を灯火が示す。

「問題は、あの王と」

「アズリエル。まさかこの用な場にて出会えようとは」

「王の戦意は喪失しておる。捕らえるなら、今このときを置いて」

「ならば、【蒼の娘】では足りぬ――【超人】をはなつか」

「完成度は？」

「十中八九――勝算は高い」

「ならば、放て――アズリエルは？」

「それは、上からの意向で――【可能な限り、捕縛】しろと」

「……んな無茶な」

……最後になんか、年若い声が混じっていた。

「あの姉やん、王様より化け物だったんジャン。それをどう捕まえろってんだ」
「言葉に気をつけろ――」
「へいへい――だが、楽観気味だが大丈夫なのかい？
その【超人】だとか――あんた等結局、ただの研究者だろうがに――
今のこの場は、完全な殺戮領域（キリングフィールド）だぜ。
舐めてかかったら、首掻かれるのはこっちだぜ」
黒衣に混じった、ぼろい帽子の青年がさも面白そうに物語る。
「【死にたがり（ホープ・ダイン）】が――まぁいい。お前好みの戦場なのだろう。
お前も、【蒼の娘】の補佐――いや、どうせならアズリエルに喧嘩を売ってくればいい」
「うへぇ～……それ、死にたがり（ホープ・ダイン）じゃなくて、自殺志願じゃねえか。勘弁してくれよ」
へらへらした対応だが――男は、地下を後にする。
「ついでに地下に落ちてきた、ゴミを排除しろ」
「俺は清掃業者じゃねえっつうの！」

扉の閉まる音――

「では、ただちに【超人】を起動しましょう」

そして、封印は解かれ――――

――地下一階：研究施設――

それが、目覚めた刹那――鼓動は停止した。

それが停止した直後、【蒼の娘】と呼ばれた――人造吸血鬼、は息絶え絶えに、研究施設までやってきて、戦慄する。

「あ、あの――化け物がぁぁ……あ、」

ツインテールが尾を描き、床に落ちる。

その前には、【超人】と呼ばれた、　巨躯の化け物が、五体不満足の状態で――首だけ机の上に鎮座している状態となった。

――メインホール――

「な、何が――どうなっているんだ――」

なぞの少女が乱入し、少年が取り乱して殴りかかった後――

一斉に現れた、ゾンビ――今度は、武装までしており、セラフィスは即刻、撤退を命じた。

部下が二人、魔族の群れを何人かたたき起こし――そして、犠牲となった。

魔物も、人間も、何人もが――ゾンビに食われ――、セラフィスたちは、玄関から飛び出し、鍵を封じた。これ以上、被害を増やしてはならないと、苦肉の決断。

飛び掛る、少年を残し――

そして、数刻後――扉を開けば……

地獄が広がっていた。

魔物、ゾンビ、人間――そのどれもが、区別なく。
真っ赤に沈んでいた。

唯一――理解できたのは、ホールの奥で、比較的見覚えるのある衣装を血に染めた、

少年の遺体だけ。

なぜなら、その遺体以外がすべて――

まるで、巨大な力で引きちぎられたかのように、五体不満足にされていたからである。

セラフィスは、少年の遺体に近づく。
五体満足とはいえ、もはや人の原型は留めていないに等しい。

……あの少女の、悲しいでは済まない、悲劇の様相に――セラフィスは下唇をかみ締める。
――何も、できなかった――

――王――

セラフィスに連れられた、力を失った王は――少年の遺体にではなく、その傍に鎮座する。
墓標――王妃の亡骸、とも言えぬ魔方陣と、中央に突き立つ自分の腕。

まるで、墓所を守るように鎮座する遺体に――
王は、感慨すらわかなかった。

王の魂は、すでに死んでいた。

――少年、最後の記憶――

真っ赤に染まった――

ただ、それだけだった。

多分、俺は子供だったんだろう。その自覚はある。

だから、自棄になった。

もっと早く、何かできたはずだと、俺は急(せ)いたんだ。

気がつけば――俺は――真っ赤、に、染まった――

ああ、また間違っブチュリ――

――屋根の上――

「必然。動き出した」

とは、姉(キャス)の弁。

「……うそ」

とは、アズリエルの弁。

「信じられない」

とは、妹(レメラ)の弁。

珍しく口を開けて硬直するアズリエルこと、ルルダに、
「愉快。人とはまさに何を起こすかが計り知れぬからこそ、愉快、そして痛快」
「愉快じゃないですよ、姉さん。……こんな、酷い――」
「残酷。」
「レミィ――ちょっと落ち着いて。姉さんこれ、【彼女】の力っていうの」
「肯定。いや、別に力ではないさ――最初に述べたと思う」

そう、必然――

――地下：落とし穴先――

穴に落ちた、片腕の男と少女は――救助をあきらめて、捜索に動いていた。
入り組んだ廊下を進めばいくつかの部屋に当たるが、当然鍵がかかっており、何があるか検討はつかない。
だが、ある部屋に入り、少女アリスは、小さな悲鳴を上げる。
五体をバラバラにされた、巨大な化け物の首が、机の上に転がっており――
その元に、ツインテールの娘が、瀕死の状態で倒れていた。

9【そろそろお休みですか？】

9【そろそろお休みですか？】

「……正直な話、少々慣れてしまいました」
「不憫だな。いや、豪胆――なのかも知れんな」
唐突だが、少女と片腕の男の会話の冒頭である。

廊下――片腕のおじさまでは抱えられないので、私と協力しながら、彼女を連れて廊下に。
さすがに死臭ただようあの部屋には、居たくない。と言うか、いられない。

途中、「おう？　蒼いお嬢ちゃんじゃんか？　アンタら、殺したん？」
と、みょうにラジカルなおじさん……訂正、青年が現れて、おじ様が警戒したが、
「んなわけねぇか――手当てかい？　この部屋ぜんぜん、鍵かかってて開かねぇだろう？」

ガッゴン――と、近くの部屋を蹴飛ばして、中に侵入する。
青年が最初に入り、中を覗けば――かなり広い部屋であるのがわかる。
誰かの私室らしく、簡素なベッドと本棚――わけのわからない巨大なガラス容器などが並んだ部屋。

そして、私がベッドにそそくさと彼女を寝かせ、手当たりしだいのタオルと、簡単な止血を施して、冒頭の台詞に入る。
「ただ単に、クリスが喧嘩っ子だっただけです。自然と覚えたんで

す」
「そ、そうか――」
おじさんは、何を勘違いしたのだろうか……
でも、酷い――
あのゾンビさんたちにやられたのだろうか。引っ掻き傷やら切り傷はわかるけど、打撲や打ち身まで――まるで、無数の攻撃を一斉に食らったような……
「あ、忘れてた。おじさん、ありがとうございます」
あ、間違えた。
「いいよ、おじさんで。何……その娘っ子は知り合いでね。うちの上司の娘っ子でさ――さっき来てた白い教会のお兄さんたちがいただろう？」
あの白いお兄さんに、実の兄を殺された妹さんさ。
「……あ」
…
……
……
いくつも情景が、閃いては沈んでいった。
「……まて、貴様」
「おっと、おっさんおっさん。殺すんだったら、さっさとそのお嬢ちゃん人質にして殺してるって。
お察しのとおり、俺はここ根城にしてる邪教団とか言われてる連中の雇われ人だ。
ハッ――俺も堕ちる所まで堕ちた暗殺者ってわけだ」

おじさまの視線が鋭くなり、何やら不穏な気配が漂った刹那――
爪――
「うわぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ！」
女の子が飛び起きて、私の首を締め上げ――ようとして、暗殺者のお兄さんが近くの椅子で、少女をたたき飛ばした。
「落ち着けって、ライラ――吸血鬼に堕ちたアンタが、何を恐れる」
「がっ――はぁぁぁっっ！」
優雅なツインテールが床にしなだれ、少女は体をちぢ込ませたまま――目を見開いて、何かに怯えている。
「なぁ、ライラ。教えてくれ？　俺は、どうしても、どうしてもど～～～しても、知りたいんだ。なぁ？」
そして、暗殺者の青年の笑顔が、凶悪に――そして、邪悪に歪み、ようやく私は、コノ人が【悪い人】だと気がついた。

「なぁ、あの【超人】の化け物を縊(くび)り殺したのって、誰だ？」

――――――
「て、撤収ですって！」
二十名いた神殿騎士が、いまや十名……詮索に発ったローランたちが帰ってきて、ようやく十五名。だが、未だ安否は不明。

調査して半数が行方不明となっては、撤収も余儀なくされる。
「うん、本来なら、部隊長である僕は――詮索を断念し、ローランたちには悪いけど、この旨を教会へ報告へ行くべきだと、そう思っている……」
「いや、隊長？　アクセントルビ標準装備を強調してる時点で、考えわかるから」

と、年若い隊員が手をひらひらさせ、
「ローランさんには俺も隊長も、だいぶ世話になってますからね」
「とにかく、ローランさんに指示を」
「おいおい、隊長をないがしろにするなよ。さぁ、ローラン隊長を早く探しに」
「いやぁ、息ピッタリですねぇ」
と、何故か魔物組のはずのチキンこと、コカトリ執事まで会話に参加してくる。

玄関先の居間は、閑散と静まり返っている。
魔物と人間のならず者混成チームは、リーダーである筈のギルガメッシュ王が、王妃の亡骸の前で沈黙しており、実質無力。
いや、チームの中核であったチキンや、夢魔と呼ばれる道化の少女や、ダンサーなる謎の赤い娘が、指揮をとってはいるが、実際は王の絶対的カリスマによって統制されていたチームであり、やはり無力化は否めない。

「……あのねぇ、皆。ちょっと怒るよ」
『はい』
どうも深刻な面持ちで震えるセラフィス（一応、本隊長）に、冗談は通じぬと、隊員一同、一斉に整列し――

「僕の考えは単純。当たり前だけど、僕は残る。ローランたちもだけど、一般人まで巻き込んだんだ。
ケジメは付けたい。さぁ、後は誰が残る？」

「よし、ここは俺に任せて、先に行け！　隊長！」
「それ死亡フラグだって！」
「俺、コノ任務終ワッタラ結婚スルンダ♪」
「お前もう結婚してるだろうが！」
「いや、二人目」
「なんで世の中、こんなブ男が！　納得いかん！」
「所詮、世の中、金の力なのだよ」
「給料おんなじだ！」
「使い方が違うのだよ！」
「全部、嫁に取られてるだろうが貴様」
「俺は、重婚は犯罪だと突っ込みたかったんだが」
「デューク公は１００人の花嫁がいると仰っていたぞ」
「それはうちのオカンに告げ口しておくから、お前ら黙れ」

『隊長がオカンって言ったぁぁぁ！』

隊員、何が嬉しいのか指差して大笑い。
「お前ら、ゾンビに頭から齧られてしまえぇぇぇぇぇ！」

そして、当たり前だが、こんな馬鹿な連中である。残らないわけがなかった。

「賑やかなのもいいけど、さっきのあの吸血女」
と、赤い娘――ダンサーが会話に入り込む。

「吸血女？　ケルベクを殺した女の子」

「ああ、あの身体能力の上昇具合は、吸血化のアレに近い。アレが現れたら、今度は私に相手をさせろ」
「ダンサーは単体戦闘においてはウチの花形なんで、信用は置けると思います」
さらに割ってはいるチキン執事。
「王、ギルガメッシュ陛下から、格闘術に関しては叩き込まれている」
「むしろ、お願いいたします。僕は――僕らは、地下に囚われた二人と、残った隊員の救助を――」

「その取引は必要ない」
奥へ続く両扉から――

彼らは知らないが、ライラと呼ばれた、蒼い髪をツインテールに靡かす少女と――

「あ、あの……わ、私たちは、その、ぶ、無事です。え、えとえぇっと……」
先ほど落とし穴に落ちてしまった、アリスと片腕の元騎士が、少女の背後に連れて現れる。

「簡単な取引だ。チビガキ……お前の命と引き換えだよ」
蒼い髪の娘が両腕の伸ばし、鋭利な爪が一枚一枚、セラフィスを映す。

――――――

邪教団 - 地下大聖堂

「誰だ……誰が【超人】を――」

「あれは、我らが【死霊術】を駆使して生み出した、超再生能力と暴欲にのみ動き出す、生命体」
「死者の寄せ集めを、生命体と呼ぶのはいかがかと……」
暗闇に蝋燭。
密談にはうってつけというか、暗黙の了解の場所で――
ありえない影が動いた。
「誰だッ！」
それは、今までの常識や、暗黙のルールとか、そういったものを、覆す。
「……」
ピチャリ、ピチャリ……

さて、お気づき願いたい。
彼が何者か、ではなく。
一体何が起こっているか――でもなく。

この館について。
かつて、この地の周りは戦場であった。
無数の人間が死んだのだ。
それを根城に、幻想世界の定番、【死霊術】を駆使して、死体をリサイクルしてきたのだ。
人知れず、人知らされず。

邪教団は狡猾であった。
普通の旅人は、襲わない。襲う意味がない。
死体なら、いくらでもある。

外の教団員に言伝れば、外界にも影響を及ぼせる。
そもそも、あの蒼の娘だって――その伝で、餌を垂らせて呼び寄せたのだ。

その餌が、今回食いついてきたのは、教団でも意外であった。
単なる護衛――帝国の聖教団への牽制が、こうも見事に功を成したと思ったつもりであった。

だが、何故？　ならば、セラフィス、クリス一行、そしてギルガメッシュ王を、襲ったのか。

違うのだ。
ギルガメッシュ旅団は有名そのもの。襲えばこの地が知れ渡る。
セラフィスたちに至れば、天敵の網にかかるも当然。
クリスたちは不幸な犠牲者で済むだろうが、それでも行方不明者が出てしまう。

彼らは、【アズリエル】を狙ったのだ。
黒衣の三姉妹。

ただの人間でありながら、脅威の身体能力と技能、加えて――女。
女と言う生き物は、それだけで利用される。
あまり公言できる内容ではないが、その子供と言うだけで、その才能を受け継ぐこともあり得る。

男ではこうはいかない。子供とは、主に母親に影響されるものだから――

ピチャリ――ピチャリ――

現実に、世界を戻そう。

そう、アズリエルは【化け物】と呼ばれながらも、人であり――そして【化け物】の由縁継がれる伝説でもある。

一個師団を壊滅させたとか、戦場に現れて両軍を全滅させたとか――

ゆえに【無数のゾンビ】軍団である。

ピチャリ――ピチャリ――

生半可な、一兵士――雇われ暗殺者や、改造吸血鬼では潰された際の対処がない。

【超人】とて、彼らにしてみれば気休めでしかない。いや、彼らは期待はしていた。彼らの最高傑作には違いなかったのだが。

ピチャリ――ピチャリ――
ピチャリ――ピチャリ――
ピチャリ――ピチャリ――

だが、彼らはひとつ――いや、もうこの物語の時点で、始まった時点で、彼らは気づいていなかった。

彼は――否、この大聖堂に現れた【彼女】は――
アズリエルではない。

煌めく――無数の刃物、牙、爪――？
暗闇で見えぬ、映せぬ筈なのに、穿つ視線――

お気づき願いたい。

地下の、彼らの心臓部というべき場所に、なぜ「ゾンビ兵士」が配置されていないのか。
いや、いた。
本来はいた筈なのだ。

ただ、すべて――壊されてしまったのだと。

だれがって――

大聖堂で、絶叫が木霊した。
こう言うシーンだけは、常識にそって描写をさけても大丈夫だろう。

生々しい思いがしたいなら、ご想像あれ――

――実際は、もっと凄惨だ。

１０【では、そろそろお開きとなりましょうか？】

１０【では、そろそろお開きとなりましょうか？】

「思出。この件の犯人についてだが」

「急に何よ、姉様――」

屋上でくつろぐ、黒き姉妹たちの会話の一片。

「物語（モノガタル）。かつて、帝国と聖国に暗躍したと言う、暗殺組織があったと」

「急にリアリティーが無くなりましたね」

「無視。その中に、【紅蓮】なる女暗殺者がいたのだ」

「あっそう――その人が犯人だと？」

「出身は、蒼い海を見渡せる土地だったらしく、その地で、地上最強の将軍と戦って後、消息は不明らしい」

「死んでんじゃないですか」

「と、思う――生きていたら、いい年の筈だ……だが――」

と、燻らせていた紅茶を飲み干す、姉。

「相似。手口が似てる。その紅蓮とは、要するに燃えるような髪と、冷酷な瞳を持ち――故郷である、【蒼】を憎んでいた。ゆえに、相手の血を徹底的にぶちまけて殺すのが特徴だと」

「とても最悪なご婦人ですね、死ねばいいわ」

「で、レム？　誰だと思う？」

突然、姉君は意地悪に唇を歪める――

「……姉さんから、枕が消えた」

それは、珍しく姉が「楽しんで」いる家族へのサイン――

「つまり、【姉さんは知って】いるんですね？　……誰が、最強で、誰がアズ姉さんをぶっ倒せるのか」

「うん」

ころりと笑みを転がす。
「つまり、アズ姉さんが私のために、アリスちゃんやクリスを助けに行ったのは、無駄な行為だと」
「否定、無駄ではないわ。心が命じた、感情のままに動く、人間的、思慮が足りないと言えばそうだけど、大切な個性だとは思う。問題なのは、忠告も聞かず、面倒くさげにダラダラしている、ルルの方」
「……キャス姉さん、なんかアズ姉には厳しいよね」

「ルルが最強とか、死神とか呼ばれるのはね？　ルルダが弱い相手しか戦っていなかったからよ」
と、枕詞も笑顔も消えて――キャスティナは、紅茶を簡易テーブルに置いて、瞳を空に向ける。

「軍隊や組織の集団兵って言うのは、ある一点を突けば、脆いのよ。もちろん、その集団によるのだけど、ルルダはそれを見抜く、いや――【見破る】瞳が強すぎるのよ。
それでいて、あの子――優しすぎるでしょう。
見てないところで、いろんな【死】を見てきた。
戦争や、災害、飢饉――物語にありがちな悲劇でさえ、あの子は経験してしまった。
そして、何より――【人間は弱さ】が【強さ】になる、特殊な生命体。
【弱さ】を見抜けるアズ……ルルダは、人間にとって天敵でしかないのだ。
アイツは、自分でも気づかぬうちに、相手の心を読み、見抜き、そして抉る――そして、潰す。
だがな？　【弱さ】も【心】もない【化け物】には――それは通じない」

――やっと、実力で戦える相手に出会えたのだよ――

「でも、姉さん卑怯技ありすぎですよ。無限の武器とか、無詠唱の連続魔法とか、見抜いてきた体術とか――」

「戯言。あんなもの、結局は【模倣】に過ぎない。オリジナルには劣る、私はなぁ、実は少しだけ、信じているんだ」

ルルダの、実の兄上――

「そ奴は、どれほどの実力なのだろうなぁ？」

「知りません。と言うか、物騒です」

「許せ、武人のサガよ。つい己の力量と比べてしまう。しかし――そろそろ紅茶が冷めるな」

手にとって、ふと、気づく。

「だが、思うように狂乱は続かぬようだな」

「？」

「そろそろ、お開き、と言うことだ」

――玄関先広間――

朽ちた遺体は何を思うのだろう。

残された生者はただ、絶望に落ちるだけだが――

ただ、一つだけ――

その、剣は――無念を残していた。

砕け散った剣身には、無数の遺体が重なり――
主はただ、愛する者の躯に涙し続ける――
（……嗚呼、あ、ああ、ど、いつも、こい、つもば、か、だなぁ――）
（……さん？　エクス、……バー…ん）
微かな胎動――
だが、物語の舞台上には、届かない。
――――
舞台上で対峙するのは、灰白髪の青年と、独特の蒼い髪を靡かせたツインテールの少女。
お互い、位置を取って――それぞれの思いを馳せていた。
一人は使命――
一人は復讐――
「どうして――こんな、ことに――」
アリスはただ、見守るしかできない。
本当に……？

セラフィスには、先日のデジャブ。
ライラなる娘には、望んだ復讐の舞台。
……対して、望まぬのはただ一人の少女。
（違う、どっちも、どっちも間違っている）

娘の背後には、少女と片腕の男――セラフィスに選択権はない。
断れば、躊躇い無く――
何より、騎士団の一員として、一般人を放置していく――優等生の模範とも言えるセラフィスにはさらにできない。

「……僕が勝ったら、返してもらうよ？」
「フザケルナ。私は、【命をよこせ】っつったんだ！」

火蓋などない。すでに殺し合いは始まっていた。
足元が、爆発するような衝撃音――ライラの床が砕け、一直線に飛んでくる。
それを、

あのときと、同じ――最小の動きで、避け――？
最小の動きは、最大の未予知によって崩された。

靡いたツインテールがセラフィスの視界を大きくふさぎ、次の動作が見えない！
特徴的な、長いツインテールが大きく広がり、セラフィスの視界を奪い去る――そして、セラフィスの【予知】とは、単なる【予測】に過ぎず、【見えない動き】には、把握しようが無い。
加えて【髪】の動きなど、重力の法則以外、何が予測できよう？
先が見えなくなったセラフィスは、後ろに大きく後退し――
そして、腹部を抉られた。

五本の鋭い線が、セラフィスの腹筋を切り裂き、剥ぎ取られた皮が衣服とともに床に落ち――セラフィスが後ろに倒れた。

部下の悲鳴に近い怒声が響く。

間に合わない――

ライラの速度は、人間のそれを遥かに超えている。

今、立ち向かえど――セラフィスの命は、簡単に奪えるだろう。

そして、彼女はそれしか眼中に無い。

「皆――」

彼女たちを、守れ――と。

部下の二人が、アリスと片腕の男に向かい、もう二人が命がけでライラに飛び掛るが――セラフィスの予知には、すでに自分の首に手を伸ばすライラが見える。

ああ、良かった――

復讐は終わるし、彼女たちは助けられた。

僕は死ぬけど、最悪までは避けられそうだ。

嗚呼、生き残るのを見守れなくて、まだなんとも言えないか――

でも、お願いだ――僕は殺してもいいから、皆を助けて――

嗚呼、神様が欲しいな――

――銃声――

未来が、崩された。

ライラの動きが止まり、血の瞳がアリスに剥かれていた。

「な、なんで――？」

セラフィスは、何事か――一瞬迷い、そして理解した。

アリスが手にしているのは、アズリエルが生み出した【拳銃】。

幻想世界の、禁忌にして比類なき【強さ】の象徴。

【弱者】に【強者の驕り】を与える、最強の――【兵器】。

「駄目ぇぇぇ！　復讐は、復讐は――駄目！」

アリスの痛切な叫びは――

「……知るかぁぁぁぁ！」

だが、拒絶される。

そして、運命は逆転する。

たとえ【強さ】でも、アリスはか弱い娘――吸血鬼の身体能力に、体が反応する筈が――

「お、おじさま！」

「妻にあったら、よろしく頼む」

ここで死亡フラグ。

だが、このメンバーにはまだ、【最強】が残っているのを――誰もが、忘れていた。

片腕の男が振りかざした剣ごと、男を血まみれに変えようとした鉄の爪は――

巨大な【肉】によって、防がれた。

まるで精巧な彫刻のように、掘り込まれた肉体に――生々しい傷

跡が、刻まれる――だけ。

鉄を砕く爪が、たった【肉】を崩せないのは幾多の修羅場を潜り抜けた、勇者の証。

英雄の――証。

「……我は、腐っても……勇者王である！」

１１【今宵は、我らが幻想小説をお読みいただき】

１１【今宵は、我らが幻想小説をお読みいただき】

我は、王である。

生まれながらに、勇者として、王として、人の上に立つ責務を背負わされた――

ただの人間の小僧に過ぎぬ。

だが――

我は、逃げ出した。

――王になど、ならぬと。

ただ、好きなように生きようと――

好きなだけ、好き勝手、好きなことを――

？

？？

我は、何が好きなのだ？

「それは、王――いえ、愛しいアナタ、それを見つけていくことではないでしょうか？」

「楽しいこと、笑えること、嬉しいこと」

「それを見つけ出そうと、あなたは旅立ったのでしょう？」

そうだ、我は、面白おかしく、この生を謳歌したい。王などとい

う身分など、本当はどうでも良い！
ただ、お前らが――我が友たちが、愛しい妃が――人間ではないからと……

ならば、我が王となろう。
人も魔も、関係ない――

そう、人と魔と――
「お前は、弱者だ――」

……人と、魔、と――お前は？

「お前は、敗者だ。敗者はただ、失うだけ――」
その通りだ。
それを、俺は何度も味わってきた。

ならば、我が強者となろう、勝者となろう！　王となろう！　誰も、我に逆らうな！
我が突き進むのは、楽園への道――大いなる王の道筋――！

「お前は、理解していない。私は――」

「破滅を望んでいる人間なんだぞ。楽園は、私には地獄と同意だ」

……な、ぜ、だ？

アズリエル――お前は、何が望みなのだ！　何を求めておる！

何ゆえ、我が妃を殺した！

「怖いから、強いから、悲劇だから――お前の女は、私の大切な物を奪える力があって、お前は奪う引き金に違いなかった」

我は、あの小娘を殺そうとはしていない！

「だが、妃は違う。お前が望まなくても、私に敗れる前に、人質にはとっていただろう。

……私は、嫌なのだよ。お前と同じなんだよ。

自分の思い通りにならないことが、すこぶる大嫌いなんだ」

……あ

「お前を、半殺しにした時点で、あの女は、妹を半死半生に変えるだろう、一瞬で。

私が悲鳴を、上げる、たった一瞬で――

お前もそうだ――

私たちは、ただ、コインの表裏のように、勝者と敗者に、分かれた――ただ、それだけだ」

ふざけるな！

「そうだ、現実はふざけている。何が二者択一だ――何が勝敗だ。何が【それだけ】だ」

……貴様が、何を抜かす！

「私だからこそ――言うのだ！　お前にわかるか？」

「【この世で自分が最も憎い】人間がいることが――」

ならば、自殺でもすればよい！　我の女を殺すいわれにならぬわ！

「だからこそ、貴様は――」

【餓鬼なんだ】

――――

「そうだな――我は――」

背中に刻まれた五本の切り傷が、赤く広がり――表情が苦痛に歪む。

違う――歪むのは、己の信念が揺らいだ絶望からか――

「我は、子供だ。お子様であろう――主ら、オトナの苦しみなど、理解に苦しむ――だがなぁ」

「お前らが愚駄愚駄（ぐだぐだ）抜かす屁理屈、小理屈には、理解と言う行為すら愚考じゃ！

何が復讐じゃ、何が仇じゃ、何が死にたいじゃ、何が使命じゃぁぁぁぁぁ！

オトナとは、自らの意思、思いのみを率直にぶつければいいのか！

深い思慮の後の、犠牲と生存の積み重ねの上にある行動を、ただこなせばいいのか！　違う！」

大地を震撼させる、怒声と罵声が――蒼い髪の娘はおろか、倒れるセラフィス、拳銃を持ち震えるアリス、そしてギルガメッシュの部下たちまでもが、身を震わせ――

ギルガメッシュ王は、宣言する。

「我は（貴方は）――
王（勇者）である（でしょう？）
――お前ら（私たち）、愚民に――道を指し示す、光である（でありましょう）！」

「……ハッ、吼えてろ！　死に損ないッ」
ライラの爪が、再び――今度はギルガメッシュ王の肉壁を破らんと、渾身の一撃に――躊躇する。
王は、右腕が――ない。アズリエルに切り落とされている。

片足を上げて、その爪をはじくが、二連目が喉元にめがけられ、左腕を伸ばし――骨が軋む。
ただの吸血鬼化だけではなく、身体能力も大幅にあげられる何かを施されているのだろう。

だが――

目を見開いたのは、ライラ――

「そうだな、我は何度も、死に損なってきたぞ」

肉が、砕けない。
喉が、切り裂けない――
こいつは、どこまで？　筋肉だらけなのだ！

ぶぉん――

一瞬で終わった。

巨漢の王と、身体能力が高いとはいえ、小柄な娘――決着はあっさりついた。
王の一薙ぎで、ライラなる小娘は壁まで叩き付けられて――全身からめり込んだ。

「が……！　あぁ？」
空気の漏れるのと驚嘆の混じった、喉笛。

「あ、お――王様？」
恐る恐る、アリスが訊ね――
「大丈夫だ、娘――我は王である」

片腕の王は無骨な左手で、少女の頭を撫でて、

「我が、ただ王として未熟だったに過ぎぬ――」

「……ありがとうございます。王ギルガメス」
腹部を押さえたままのセラフィスに、
「主は喋るな。おい……樹氷（コフィン）の精、おったな――奴の傷を癒してや

れ」
白磁の白い女性が現れて、その傷口に手を当てると、血液が一瞬で凍結し、生暖かい氷がセラフィスの失った肉に張り付く。
「出るまでの応急処置にはなりましょう。または、あなたたちの白魔術で癒しながら養生なさいませ」
「あ、ありがとう、ございます」

「否、まだ終わらぬぞ――」
王は――その場の登場者（アクター）たちに告げる。

背後には出口――目の前には、瀕死の小娘。そしてライラが鳴らした、最後の――口笛。

「……性懲りも無いな、娘」
そのライラを食らおうと、現れた――
腕の無いゾンビ、足の無いゾンビ、頭の無い、首の折れた――

ゾンビ、アンデッド、不死者――もう、どう呼んでも良い。
単なる陳腐なホラーで、単なる雑魚ゾンビたちであって――

復帰した王の敵ではなく――
ライラにとっての、自滅にして最後の足掻き――

「……大切な、者を、殺された痛みが、わかるなら――」
セラフィス置いていけ――

「知るか――」
ライラの嘆きを、腐敗した髑髏が頭蓋を噛み砕こうとして――王

のコブシが、ゾンビを砕く。

驚嘆するライラに、

「図に乗るな、おろかな小娘が。我は王だ――我の許可無く、死ぬのは許されぬわ」

不意に扉が叩き割られ、同時に応戦を始める――

「あ、ローラン！」

「隊長、無事でありましたかッ！」

捜索で行方不明となっていたローラン隊――帰還。

「隊長！　命令をッ――」

「決まっている」

全員、無事生き残って帰るんだ――

「その小僧の言うとおりだ！　我が従僕たちよ――」

「心得まして候」

と、執事服を破り――硬質の肌と鉄のような翼を広げた魔鳥、コッカトライス、コカトリスと呼ばれるA級魔獣の真の姿が、次々にゾンビたちを睨み――

「あ、駄目です――彼らに邪眼が効かないッす！」

「何ぬわ嗚呼！」

「どうも神経系で動いてるんじゃないっぽいです」

駄目王子と馬鹿執事の名コンビ、復活。

「役立たずぅぅぅ！」

『やれやれ――相変わらずですね』

――？

その囁きは、『王にだけ』ではなく、
その場の登場者（アクター）たち全員に、聞こえた。

響いた――

死者の墓標となっていた、王妃の墓――王の漆黒に染まった腕。
その腕に集まろうとした、ゾンビたちが――黒い渦に、飲まれ――

「私がいないと」
現れたのは、漆黒の、幼女――
つややかな髪と、丸い瞳――体型は大幅に削られたが――

「本当、駄目ですね。陛下――」
「ふん、当たり前よ。我は――永遠の王にして、」

永遠の糞ガキであるからな――

「我の許可無く、死ぬことは許されぬぞ！　エンキドゥ」
「畏まって候、ゆえにこうして、舞い戻って参りました。
ただ、手違いで――」

ちょっと人間になってしまったようですけどね？

「で、陛下？　出来れば助けて欲しいです？　人間バージョンでは、混沌が自在に扱えなくなっているんです」
「あじゃばぁ！　ぬぅぅぅおぉぉ〜〜〜！」
王が大慌てでエンキドゥの元へ駆け寄ろうと、群がるゾンビたちを――
銃声――
「お姫様を！」
ちょっと勘違いしているアリスと、
「ん――」
片腕――そして、『失った腕』に剣を嵌めた、元将軍が大立ち回る。
「ん、感謝するぞ――娘、片腕の男よ！――」
エンキドゥを肩に抱え――全員が、無事を確認すると――
「脱出せよ！」
王の号令一つで、この館の幕が下りていく――

12【ありがとうございました】

12【ありがとうございました】

〜館の外〜

館の扉を急ごしらえで修繕、修復し――完全密閉してからのお話。
いや、これは彼らにとっての、終幕。

「……なぜ、私を助ける」
髪と同じ色の表情のまま、蒼い髪の少女、ライラは言う。
「先も言ったであろう。我の許可無く、死ぬのは許さぬ、それに――」
王は、アリスを見やり――
「子供の前に、死体を晒せなどできるか」

「くすくす」
と、小さく笑う――童女。

「しかし、王妃よ――何故人間、いや、そんなに小さく」
「え？　……わかりません」

舌を出して微笑まれた。
片腕の男は、その反応に何も言えず――

「なぬ？　エンキドゥ、主の秘術や何かではないのか？」
「はい――……王のお声、涙――ずっと傍で聞いておりました。
暗く、冷たく、――いいえ暑さも寒さも何も無く、ただ虚空に浮かぶような、

……王の涙とお声が無かったら、おそらくこの場にはおりませんでしたでしょう」

と、前と変わらぬ慇懃さと礼節で、小さい体で礼を作る。

「……さっき、人間になったと仰っておりましたね」

腹を応急処置し終えたセラフィスが、改めて訊ねると――

「はい、……どうもこの体の感触、神経――実感は」

あの時、アズリエルにかけられた、人間の肉の器――

「間違いありません。この肉付き、肌触り、暖かさ――間違いなく、人間のソレです」

「魔族が、人間に――」

「そんなことどうでもよい！」

と、急にエンキドゥを抱きしめ上げる、国王陛下。

「そちが無事で、本当に良かった。生きてくれて、帰ってきてくれて、我は、本当に――」

「アハハッ、国王陛下――お涙をお拭きください」

「そうです、国王陛下！　はしたないです」

止めに入るチキンに――

「それに、人間になれたということは、世継ぎも」

「おおぉぉ！　そうであったな！」

『ちょぉぉぉぉぉっっっっっと待っっっっったぁぁぁぁぁ！』

盛大な静止が、森全体を震撼させた。

「その子、子供子供！」

「ロリに堕ちたと思えば一気にそれかよ！」

「陛下、も少しお待ちください！　まだ小さすぎます！」
「王、真の犯罪者になるつもりですか！」
「真の勇者めッ！」
「新たな伝説が刻まれる」
「とりあえず全員落ち着きやがれ、お前ら全員の面倒など見切れんぞ！」

魔物どころか、セラフィスの部隊員までが囃し立てて、ローランと赤面した王が激昂して次々投げ飛ばす。

「……良かったです」
アリスは、その姿を遠巻きに眺めながら――
片腕の男とともに、再び館を見据え――
「戻る気か」

瀕死のライラが苦し紛れに告げてくる。

「はい、大切な友達が、残ったままなのです」
「……友達？　……は、全員死んだよ」
（まだ、例の化物が中に残っているからな）

「そ、そんなっ！」
「ふん、館なら我も戻るぞ」

と、宣言した王。
「へ、陛下！」
「中にまだ、アズリエルがおる。我の中に、直接語りかけてきおったからな」

国王陛下は片腕のまま、ぶんぶん腕を振り、

「それに、遣られっぱなしでは、カッコがつかんだろう？」
「言うと思われました」
と、チキン――やれやれと言う表情だが――
「ん、チキン――それに他の者ども……お前らは、この騎士団と小娘を町に送り届けよ」
「しょうがありませんから……はい？」
チキンの台詞の続きを割って、王は告げる。
「我は、一人で館に乗り込む」
「ば、馬鹿ですかアンタは！」
「我は王だ」
突っ込んだチキンを一旦血祭りに上げてから――
「決着くらい、我一人でつけられるわ。と言うか、はっきり言えば邪魔」
「では陛下――私も」
「エンキドゥ……主もだ」
王は頑として言い放つ。
「今のお前は、人となった。魔族の姿のままでも、アズリエルには無力だった」
「ですが、王！」
「何度も言わせるな、我が妃――我は、我自身の腕で決着をつけたいと言うのだ」
たった一人の王として……
そう告げた王が、振り返れば――
「愉快――少年とはそうでなければならないな」

【私は不愉快です、姉さん】

「……アレ？　貴女は――」

一番に反応したのは、意外にもアリスであり、

「必然。また会ったな、薄幸の美少女」

「酒びたりのお姉さん」

「誤解、私は単なるアズリエルの姉にすぎん」

その言葉に対し、反応はまちまち。

驚愕が大半を占め、警戒のまま表情を引き締める騎士団が数人――

現れたのは、巫女装束の――やはり黒い手ぬぐいを目元にまいた、表情の伺えぬ娘が、アズリエルの妹、レメラなる娘の手を引いていた。

「枕詞。妹が手荒な真似をしたようだな。軽く謝罪はしておく」

「謝罪だと――」

「仮初。姉としての謝罪だ。悪いのは妹（アズリエル）だし、責任を取れというなら、私にではなく、まず、アレ（ルルダ）にしてもらおう」

「我が妃を殺しておいて――」

「接続。だから私ではない、と。そしてレム――このレメラでもない。妹の尻拭いなど、真っ平だ」

【酷い姉がいたものです】

「大違。ルルの責任はルルのもの。勝手に奪ってはならない」

「抜かすな――アバズレの姉だか何だか」

「静寂。静まるがいい――王よ」

「そうです、陛下」

割って入ったのは王妃。

巫女装束の娘は、その少女を見据えて一言。

「人形。人の形をした人間――ルルの奴も甘すぎる、いや意気地が無いと言うことか」
「……やはり、私の体はアズリエルが？」
「不解。私の専門は【破壊】だ。魔術、操術……創生術に関しては無知そのもの」
【キャス姉さんは単なる剣士でしかないわ】

黒衣の姉妹は踊るような足取りで、王の前にやってきて――

「提案。決着をつけたいのなら、私が取り計らっても良い」
「……なんだと？」
「依頼。理由があってな――今、館内でとんでもない化物が大暴れしていてな」

今度反応したのは、瀕死のライラ。

「はっ、あの紅いのか……」
「然様。まぁ、死にはしないだろうが」
「死ぬ、だと？」
新たなる登場者（紅きもの）の何、王が間を区切る。
「然様。ウチの妹……でも、勝てるかどうか」
「ほぅ、アズリエルよりツワモノ――と言うことか」
「必然。アズの殺害量と比べるなら、かの紅き獣は――最悪」
「……俄然、面白い」
『面白くありません！』「陛下ッ！」

家臣やチキン、それに加えて王妃までもが参列し、
「心配無用。――だから私が現れた」
と、巫女装束の娘。

燦然と抜き放ったのは、身丈を超える漆黒の両刃剣――

「まどろっこしい話は終わりだ。私もさっさと中に入って、一暴れしたいのだ」

【姉さん、正直なほうがいっそ清々しいわ】

「ほほぉ、お前が我の共につくと」

「当然。姉として、妹を迎えに行く――けしかけたのは私でもあるしな」

「信用なりません」

頑として、王妃が小さな手を翻し、何人かの魔獣たちが集う。

「……アナタは、アズリエルの姉上でしょう」

「然様。反対があるとは思った。ゆえに、こちらも交換といこう――」

と、姉君はぽんと、レメラの背中を叩き、王妃の元まで歩き――

「契約。王を無事、連れて帰る約束だ。

興味。私とてこんな面白い国王を、ただただ見殺しにする気は無い。武人としていずれ手合わせ願いたいほどだ」

「ふん、武芸者か――少しは気に入ったぞ、娘――」

「当然。――では、参ろう。最年少王」

「ふん、では行くぞ――真っ黒巫女」

〜〜エピローグA〜〜

「……おい、報告書はこんだけか？」

と、肉声で父――デュッカが告げる。

相変わらず肉の塊で、声には注釈が必要だ。ゆえに、訳済み。

「そうですよ？」
「あのなぁ、これじゃ読者が納得しねえっての。
あの後、あの屋敷潰れやがったって、その顛末は？
他にもあるぜ？　あの片腕と娘が出会った殺人者の消息は？　そして何より、あの紅い化物の正体は？」
「さぁ、あの後、僕らは魔物連中と部隊とで編成を組んで、帰路についてしまったので」
「お前、隊長の自覚あんのか？」
「まぁまぁ、お父さん」
出た、年齢不詳ママ。
「セラフィスには後で泣くまでわび入れてもらいましょう？」
「わびいれるってどこの非合法、無職集団なんですか！　一応、教会ですよ」
「一応ではない、立派な教会だ。神様だっているぞ。一度も崇めた事無いが」
「あら、嘘。月に1度は寄付してるじゃない。教団員の給料を」
なんてヤクザな教会だ。
「まぁ、死者も出たし――少し遅れたら大騒動にはなっていたかもしれないけど」
「……すいません、あの馬鹿王とアズリエル姉妹を信じた、僕が軽率でした」
「っつ～か、動けなかったんだろう。軟弱者が」
うぅ、反論できない――
「吸血娘にも逃げられて――どう責任取る」
「じゃなくて、あなた、命狙われているのよ」
……
「死んでもいい、なんて思いなさんな。そんな軟派な考えなら、降

格も覚悟なさい」
急に事務長になって、母が宣告する。
僕は一礼して、席からたった。

「……っち、観測者の観点からでは、全容はつかめんと言うわけか」
「ええ。でも、少し安心しているわ」
「はん？」
「だって、あの子、地下には入っていないんでしょう？
邪教団の深部に入り込んでいたら、それこそ逃げられない宿命に囚われそうだわ」
「かといって、隠し立てしたままでは、アイツにとって良いことかどうか」
「良い悪いじゃないわ。あの子の度量の問題。
隊長にしたからって、あの子はまだ子供のまま、いいえ、永遠に子供のままなのよ？」
「……まぁな――」

～～～～

「陛下！　お待ちください！」
素っ裸が森を行く――肩に黒い少女を乗せて――
後ろからは旅芸団（サーカス）のような、色とりどりの住民たち。
「はっはっは、チキン――主は足が遅い！　さすがはチキンか！」
「陛下？　陛下がはしゃぎ過ぎなのです。よほど、アズリエルに勝ったのが嬉しいようですね？」
「う？　……ぬぅ、ぬぬぬ――まぁ、そうなのだが」

照れ、赤面――王は少し困った顔の後――快活に笑い飛ばし。
「よい、もう過ぎたことじゃ！　お前もこうして生きておる。今日も快晴、世は天晴れよ」
「その脳天、天晴れもどうにかしてほし」
「怒我ッ覇ァァァァ！」
「陛下！　こんな森の中で気功砲を放っては！」
「いたぞ、……げぇ！　こ、こいつら」
「ぎ、ギルガメッシュ旅行団！？」
「ほら、地味に隠れていた山賊さんたちが逃げちゃいます。さっそく捕まえて、現金と食料と」
「王妃様？　あの、腹黒さがアップしておりません？」
「我の妻の悪口は許さん！　あちょ～～～！」
『なにぃ！　あのちっこいのが嫁！』「なんて羨ましいんだ」
「ちょ！　今、羨ましいと言った奴は、絶対に捕まえましょう！
我が旅団の恥部を世界に広めては」
「何が恥部だ！　堂々と広めるがいい」
「俺らが恥ずかしいんだよ！　馬鹿王」
「良くぞ言った。死ぬが良い」

今回は王様ｖｓチキンによる大混戦による、山賊壊滅劇が繰り広げられるようです。

～～～～

片腕の男は帰ってきた。
薄汚れた室内、自分の部屋。
もう、愛した女はいない。
この物語の始まる前に、出て行ったきりだ。

今、振り返った先で出迎えてくれれば、それこそ出来すぎたロマンスであろう。
だが、振り返っても、陽光さす扉と――朽ちた郵便受けが垂れ下がるだけ……？
男はそっと――郵便受けに手を伸ばした。

～～？？？～～

あの男のいうとおりね。
……あ、ごめんなさい。あの男とはこの場合、セラフィスのお父様の方よ。
彼のお陰で、この事件のだいたいの粗筋が見えたのだから。

別にたいした収穫ではなかったわね。
記録しかり、歴史しかり、人の記憶しかり――
欠けてしまった物語がなければ、すべての筋が通らない。

でも、これがこの世界の、剣と魔と戦争から生まれた物語の――小さな歴史。

ふっふ、裏側の歴史を知りたいですか？
あの男――この場合は、ザックス・バーンフレア。
魔術教会の賢者にして、教会の司祭長。そして何より【邪教団】の裏の裏の理事長。
彼なら、この事件の全容を説明できるのでしょう。

でも、【真実】にはたどり着けない。

……私も、たどり着きたいな？

ねぇ、【お兄さん】？

「……んぁ？」

次の物語では、【真実】が見えるでしょうか？

「ん～　そりゃ観測者によるだろうな。言うなら、アレだ。

【幽霊】を【自爆霊】だとか【浮遊霊】だとか【プラズマ】だとか、解釈の違いが出てしまうのと一緒」

お兄さん？【自縛霊】ではないですか？

「だから【間違った】解釈。と言うパターンもあるのさ。読みなれた人物なら、ボケやオチ、大抵は【誤字】と思うだろう。

ただな、【わざと間違う】ってネタだってあるんだって話」

わざと――

さぁ、次の物語で出会いましょう。

裏の物語で出会いましょう。

今宵は、幻想魔蝶物語をごらん頂き、ありがとうございました。

少し曲がったハッピーエンドでございましたが――

次回は、バッドエンドでお会いいたしましょう。

～～～～

私とクリスは死んでしまった。
でも、まぁ――いっか？

12【ありがとうございました】（後書き）

一応、【幻想魔蝶】はこれにて、終焉。
次回から、裏側の物語を進めて参ります。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３２２４ｅ／

ででは、ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございます。

メタな後書き（前書き）

この小説は後書きになります。
製作の際のネタばれ、元ネタ、作者の私生活とかろくでもない内容などがあるかもしれません。
同じ小説作家など、どんな環境で書いてるなど、参考程度になれば幸いです。

メタな後書き

【魔蝶の女】あとがき

『邪魔ずるぜぃ』
【いらっしゃいませ】
『さぁ、誰が主役だい？』
【今回のホストは彼女でございます】
『じゃあ、始めてくれ』
【それでは、しばしの間、ご堪能下さいませ】
『ちょい腹減ったな』
【では、召し上がれ】
『イタダキマス』
【居心地はどうでございましょう？】
『ちょい休憩』
【どうぞごゆるりと……お休みください】
『さぁって解決編』
【では、お悩みください】
『アレ？　ちょっとまって？』
【謎々はまだまだ続きます】
『うぅん――』
【そろそろお休みですか？】
『降参！』
【では、そろそろお開きとなりましょうか？】
『中々愉しいミステリーだったよ』
【今宵は、我らが幻想小説をお読みいただき】
『御馳走様』
【ありがとうございました】

最後まで読んでやったぜ！　と言われる猛者様。
かなり拙い＋誤字脱字未修正な超駄文を我慢しつつ、本当にありがとうございます。

「案外、飛ばして後書きだけって方もいるかもな」

その場合、挫折させてごめんなさい。

「今度はちゃんと読みやすく、かつ二章は二章で単文で読めるように致します。はい」

えっと、打ち上げ会場あるんで、そこ移動しまっす。

↓「変態の経営する喫茶店」（Ｓｅ：ＤＱの階段の音

ギルガメッシュ「うむ、ここはどこなのだ？」
アリス「えっと、現実世界のどこかの喫茶店だって。たぶん、フィクションでしょうね」
セラフィス「えぇ～っと、皆？　あんまり騒がしくしないでね？　あ、作者さん来た来た」
ＡＬＦ「うぃ～っす」
猫「宿題やったか？　歯ぁ磨けよぉ～」
セラフィス「えぇ～っと、ご紹介します。筆者のＡＬＦさんと、その相棒、猫さんです」

ＡＬＦ「こんにちは、自己紹介遅れまして。ＡＬＦＲＥＤこと、前半分のＡＬＦと申します。趣味はゴロゴロすることです」
猫「飼い猫の、猫だ――名前はあるけど、まぁ猫でいいだろう。ＡＬＦの突っ込み担当。趣味はゴロゴロしたＡＬＦの腹の上で寝ることです（実話）」
ＡＬＦ「……文章の添削もしてけれ」
猫「自分でやれ（普段はここに顔文字が入る）」

セラフィス「えっと、今回は――あとがき、って何で打ち上げ会場なんですか？」
ＡＬＦ「いやな、俺は一つの作品を【終わらせる】のが中々できなくてな。
今回も未修正、ながらも――一区切りの終了～って意味も込めて。
あと、気分的に大好きなんだ、打ち上げ」
猫「普段、家でゴロゴロしてるからな」
ＡＬＦ「うっさい――まぁ、小説キャラでまぁ、ぶっちゃけ会とか、裏打ち話とか色々できればな。
まず、何から話そうか」

セラフィス「そうですねぇ――キャラクターメイキングとかあります？」
ＡＬＦ「あるあるあるある。っつか、本編後半、空気化してたセラフィス君、今回は司会役を奪って、頑張っております」
セラフィス「ちょ！？」
ギルガメッシュ「ん？　ふん、たかがどこぞの木っ端宗教の一隊長。しかし隊長であるが故の悲しさか。泣く泣く結局引率しつづけるしかないのではないか？」
アリス「あ、王様――そんなことといって、食べるのに夢中じゃないですか？」
ギルガメッシュ「む、しかし娘よ。この珍妙かつ美味な食事。

あのような隅っこ携帯小説家のたわごとより、よほどこちらの方が価値があるとは思えぬか？　この坦々麺とやらを持ってまいれ！」
アリス「うぅぅ、確かに」
ＡＬＦ「……こいつら酷ぇ」

猫「では、まず――セラフィス君は一回、ミクシィでオリジナルキャラクターのメイキングってのを募集して、一個だけ返事来たんだ。気がする」
ＡＬＦ「その時点でしょっぱいぜ……」
猫「たくさん来たらどうしてた」
ＡＬＦ「マンドクセ」
猫「爪とぎの舞！」

猫「えっと、昔の杵柄――ＦｉｎａｌＦａｎｔａｓｙ小説ってのをＡＬＦのＨＮで遊んでましてな。
色んな企画を、ＦＦ好きの高校坊たちで集って遊んでまして。
その名残を絶賛、放置プレイしてるんですが――。そのさい、オリジナルキャラクターを作ろうってネタを昔作りまして」

セラフィス「へぇ、それで僕生まれたの？」
猫「いんにゃ、ほぼ募集どおりの内容利用したけど。
植物魔法とか鎌とか……どうやったら神殿騎士になれんだってキャラを無理やりねじ込んだらこうなった」
ＡＬＦ「空気になった。た～お～せ～～～ない～よ～♪　あ～の竜巻、何回やっても」
猫「はい、危険球――」

猫「次にギルガメッシュ」
ギルガメッシュ「うむ、我か――存分に語るがいい」
猫「では、結論。（ＦＦ５＋Ｆａｔｅ）÷ＡＬＦの悪乗り」

セラフィス「！？　あれ、ギルガメッシュって――あの？　え！？」
猫「うぅん、ギルガメッシュはＦＦ５が最初で、幼少のころからＡＬＦの英雄像の一角を担っているんだよ。漫才的な意味で」
ＡＬＦ「エンキドゥが嫁なのは、【こんな解釈もあっていいんじゃね？　っつか、エロスをくれ！】だったんだ。
脱ぐのはギルガメッシュ担当の方向で。」
猫「うん、何か動かしててとても楽しいキャラクターだった。
っつか勝手に動いてくれて、勝手に暴走してくれて、勝手に壊れてくれるキャラクターだった。」
ＡＬＦ「さらに、Ｆａｔｅを俺はＰＳ機種で初めて知ったんだな。
主にギルガメッシュのキャラ像。
あんだけはっちゃけてて、でもどこかＦＦ５のギルが後ろ過ぎるんだよ」
猫「向こうが赤ギル、ならこっちは金ギル？」

ＡＬＦ「俺のはマッパギル！
……自重して、Ｆａｔｅのギルガメッシュ見て、『嗚呼、こういう解釈もありか』で誕生したのが。
ジャングルの王者、ター●ゃん張りの、素っ裸テン狐～　じゃなかった、素っ裸ギルガメッシュになったと。
性格は王様らしく、でもＦＦ５のギルらしく、義理人情は厚い――いや、王者の風格として熱い男に仕上げたかったと――。
アズリエルに会ったのは、王者の挫折１ってことで、まぁ――」
ギルガメッシュ「ふん、王にあの程度の挫折、膝を屈するに足らぬ」
エンキドゥ「あら？　でも大粒の涙をお零しあそばされては？」
ギルガメッシュ「当たり前だ。おぬしの価値は、それでもまだ足らぬ」
ＡＬＦ「……エンキドゥとの絡みを間近で見ると、結構アレだな――むず痒いな」
猫「まだまだ修行が足らんな、ＡＬＦ」

ＡＬＦ「最後、アリス！」
クリスと遊んでたアリス「？　はぁい？　私の番ですか？」
ＡＬＦ「うぃ。……うん、実は本編のメインとも言うべき子。
この小説は、実はいくつかのリスペクトによって生まれた。
まずは『小説』。電撃文庫から『バッカーノ』の第二作目、レイルトレーサーの鈍行編と特急編。
この二部立ちってのは、この小説からリスペクトしてて、かなり感動した作品なんだ。時間系列は同じなんだけど、視点の違うところで、友情劇から惨殺劇と、立ち回りがすごいかっこよくて――
ネタバレになるから、そっちは向こうの後書きで。
とにかく、この小説の書き方は真似よう！　真似て何か見つかるだろう、と思って書き出したら――」
アリス「何年掛かったんです？」
ＡＬＦ「……一年と二ヶ月？（小説家になろう、投降日数から逆算」
アリス「……そう言えば、半年以上間が空きましたけど、何があったんです？」
ＡＬＦ「それも裏っ側で語ろう。これは表と裏がありますよ～ってお話。
で、次のリスペクトが、アリス出生秘話になるわけだ。
俺は主に、ファンタジー成分は――ＦｉｎａｌＦａｎｔａｓｙかコンシューマゲーム、または同人で補充してるんだけど、
友人に某同人音楽を貰って――ある基盤を貰ったんだ」
アリス「基盤？　ですか――」
ＡＬＦ「まぁ、物語の裏打ち設定みたいなものさ。裏っ側では結構登場してるかな。
で、その同人音楽――ＳｏｕｎｄＨｏｒｉｚｏｎ（以下ＳＨ）なんだけどね。で基盤を貰ったら、次はこの物語の基盤となる話を別ＣＤから構想。
普段、自分は音楽ＣＤ聴きながら小説をつづっていたりします。

音楽にそって、そのシーンとか結構想像したりして、物語練ってます。いつでも練ってます」
飯食ってる猫「最近は東方プロジェクトに嵌ってまふ」
ＡＬＦ「どっかいったと思ったら……。だって、派生曲にゃ絶対、そのキャラのメインテーマって感じで――咲夜！　咲夜！　ＰＡＤ長！！って叫んで」
猫「昨日は何を思ってか、助けてえーりん！って叫んでたな」
ＡＬＦ「いい小説がかけないよぉ～～～！」
猫「知るか――」

ＡＬＦ「話し戻して――アリスは完全に、歌詞から貰っちゃったんだな実わ」
アリス「はぁ、そうですか――」
ＡＬＦ「ぶっちゃけちゃうと、ＳＨのシュヴァルツヴァイスがアリスの元ネタ。君の背景はあの歌詞まんまだから。」
アリス「手抜き、じゃないですか」
ＡＬＦ「いや、あのあと迷い込んだ君がどうなるとか、それはリスナーの想像によるじゃないか。だったら、俺はこうしてやるって――無限の記録」
アリス「そうですか……それがクリスとの、出会いですか」
ＡＬＦ「親友との出会い、かな――。
さらにオマケ、同人ＣＤ出身のキャラがまだ結構。全部書ききると長いから一部省略気味で。
クリス→ＳＨアルバム　Ｒｏｍａｎより、見えざる腕。
片腕のおじさま→ＳＨアルバム　Ｒｏｍａｎより、見えざる腕。これもストーリーそのまま。
ライラ→少女病　同人アルバム　偽典セクサリスより、蒼を受け継ぎし者。
アズリエル→同人音楽グループ、Ａｚｒｉｅｌより」

ＡＬＦ「さて、このアズリエル。ぶっちゃけ先に言った、Ａｚｒｉｅｌのアルバムを聞きながら、キャラクターの下地構想は完成したりしました。
このＡｚｒｉｅｌ、一応メジャーデビューも果たして、また同人活動も続けている猛者グループで、結構お勧め。
歌い手の独特な歌唱力と、歌詞の中の世界観がとてもファンタスティックで創造意欲を掻き立てる一作」
猫「はいはい、宣伝乙」

ＡＬＦ「キャラ紹介ついでに、物語構成も語ってしまったにゃ」
猫「……あのさ、ＡＬＦ。もしかして、猫とＡＬＦの使い方、逆じゃない？」
ＡＬＦ「実はこれで正しい。俺がリアルで世界に出るときは、なぜか猫語になる」
猫「どう見ても変人です。ご馳走様でした」

ＡＬＦ「メイン世界は偽典セクサリス聞きながら、クリスやライラの出生。
アズリエルメインの場はＡｚｒｉｅｌを聞きながら、ぼつぼつ描いていきました」
猫「っつか、ＡＬＦ――流れ的にどことなく、悲しい場面とか悲壮なシーン多いよな」
ＡＬＦ「？　そうか？」
猫「もっとギルガメッシュのおき楽場面とか多いほうがいいんじゃね？」
ＡＬＦ「もっとウデにシルバー巻くとかＳＡ！！」

場、凍結――

猫「ニコ厨乙。さぁ、ほかに質問」

ギルガメッシュ「では問おう」
猫「あいよっと。あ、一応、これは『魔蝶の女』の後書きなんで、後ろの『間違った少女』のネタバレは禁止の方向でｂ」
ギル（略した）「了承した。では、アズリエルの魔法体系、あれはなんぞな？」
ＡＬＦ「読者的には興味あんのかな？　これは裏打ち設定のひとつだけど」
ギル「あきらかに、Ｆａｔｅのギルガメッシュ、そしてエミヤの無限の剣――」
ＡＬＦ「ストップ。ごめんなさい――書いてて気づいたから。だから跳ね返したでしょう？　君」
ギル「パクりは関心せんなぁ」
ＡＬＦ「でも、実際便利だろう？　使える技は奪って使う。これ、現実の競技でも一緒」
ギル「ふむ、一理ある」
ＡＬＦ「代わりに、ギルガメッシュのギミック話そうか。そう言えば、表の話では登場しなかったし、裏だと登場しただけで終わったからな。
ギルガメッシュ・エクスカリバー」
ギル「明らかにＦＦの影響だな」
ＡＬＦ「ＦＦ８ではご馳走様でした。実は昔、ギルガメッシュ・アナザーも描いたことがあります。ＦＦ小説で。
……あったら引っ張りだそうかな。
で、本家そのままパクってもしょうがないから、巨漢のくそガキ。剣は短剣クラスに縮んで、最後は剣じゃなくって、鉄拳になって大爆笑させるつもりだったんだが！」
ギル「……空気になったな」
ＡＬＦ「しゃあないやん。裏は裏の面子メインで描きたかったんだし。新キャラはそんなに出してないつもり。
序盤のフラグは消化してきた、筈」

セラフィス「あの意味不明な冒頭？」
ＡＬＦ「うん、嗚呼、最高導師のザックスは完全に適当ね。ＦＦ７の彼と同名にしてしまったのが、唯一の悔やみだ、畜生。ちなみに、イメージは年食ったレザード・ヴァレス」
猫「ヴァルキリープロファイルですか。どこまで引き出しあるんですか」
アリス「じゃあじゃあ、完成した後の感想は？」
ＡＬＦ「んじゃ、表だから魔蝶の女編。終わったら、『いよっしゃ！』とは思ったけどね。これで書きたい本編がかける」
ギル「あ”？」
ＡＬＦ「いや、ぶっちゃけ本当はクリムゾン＝レッドバロン書きたかったんよ？　よく読めば分かると思うよ。俺はこれ、ミステリー目指して書いたんだから」
猫「９流ミステリー」
ＡＬＦ「まる九って書きたかったけど、文字依存が不安だから普通に９って書きやがったな！
ーフェクトフリーズすんぞごるわぁ！」
猫「すいません、東方ネタです」

猫「はい、グデグデし始めたら一行あけて、場面変化する癖が身につきました」
ＡＬＦ「はいはい、ほかぁ～」
ルルダ「では、質問」
ＡＬＦ「？　……あ、主役だ」
ルルダ「何で私だけ打ち上げ会場で、しかもついさっきが第一声ですよ！（涙）」
ＡＬＦ「だって――その、根暗だし」
ルルダ「ガビーーーン」
猫「うっわぁ、ＡＬＦが顔文字使いたそうに俺（理性）を見ている」
セラフィス「というか、あ～あ、言っちゃった」

ルルダ「……えっぐ、えっぐ」
ＡＬＦ「実は強がりで泣き虫です。次回、散々泣く予定」
ルルダ「酷くありません！？」
ＡＬＦ「作者の愛です。Ｓ的な意味で」
ルルダ「う、うわぁぁぁん！　お姉ちゃん」
キャスティナ（以降　キャス）「肯定。虐めよくない」
レメラ「番外打ち上げ編だから、普通に話すわね。問題なし」
ルルダ「れ、レミィ！？」
レメラ「だって、お姉ちゃん、たまには泣かされれば良いのよ」
ルルダ「お、お……おにいちゃぁぁぁぁん！」
ＡＬＦ「あ、お兄ちゃんは裏方だから、次の後書きでしか出てけぇへんでぇ」
ルルダ「い、虐めだ！　なんで？　主役は私ぃぃぃぃ！」
ＡＬＦ「……ギャップ萌え～」
猫「自キャラに萌えるってどんなナルシーなんだよ」
キャス「歪自己愛。歪んだナルシスト」
ＡＬＦ「馬鹿め、ルルダは本当は可愛いのだ」
キャス「当然」
レメラ「何を言っているの？　知ってるわよそんなこと」
三者三様に持ち上げる。
猫「なんで落としてあげてるんだよ。
……そうだ、アズリエルが音楽ＣＤから生まれたのはわかったが、何で、この三姉妹なんだ？」
ＡＬＦ「ん？　……ん～、半分裏話になるんだが――この三人の裏側にいる一人一人が、それぞれ因縁の持ち主なんだよ。
でも、本人たち、本当は仲が良いのに、素直になりきれずに、こんな三姉妹が生まれたってのが真相」
キャス「成程。ほぉ――我々的リアル（本筋）で聞いていたら、また話が大きく変わってしまうな」
ＡＬＦ「まぁ、三者三様に殺し殺されしてたんだけどな」

キャス「……（頭痛のポーズ」
ＡＬＦ「あと、触れなかった役割としては――
キャス姉―リーダーシップ。一番人間に近い。キャラ作りな一面。
ルルダ―バトルメイン。アホ９。間抜け。姉妹命。
レメラ―毒。お子様。お姫キャラ。煽てたら天までのぼる。」
キャス「（腹を抱えて笑いをこらえている）」
ルルダ「ひ、酷い（ガビーン涙」
レメラ「……作者、コロス――」
猫「っつか、姉妹の扱い方が丁寧にわかれている。本当にご馳走様」
ＡＬＦ「お姉さまは大切に♪」
ギル「うむ。姉さん女房はいいぞ！」
チキン「あなたはロリ女房でしょう――って、うわぁ、台詞でた。
感激でにぎゃぁぁぁぁぁ！」
セラフィス「えぇ～……そうだなぁ、アズリエルって、錬金術の使い手ですけど、この世界の魔法の仕組みって」
ＡＬＦ「へ？　適当」
セラフィス「へ？」
ＡＬＦ「色々例え設定でも晒そうか？　音声魔術、付与魔術、精霊魔術、エトセトラ……悪いけど、この世界のほかに、あと百八式ほど、魔法の仕組みがあるんだ」
ルルダ「言ってみろ！　言い出したのなら言ってみろ作者！！」
ＡＬＦ「（邪悪笑み）……いいぜ、まずは」
猫「後書き壊すな――この世界観だけでいいなら、魔法体系に関しては、複雑に入り組んでるぜ。
セラフィスに関しては精霊魔術だが、アズリエルの錬金術は次元方定式――魔法っちゃ魔法なんだが、半分魔法じゃねぇんだ」
セラフィス「へ～……それは、やっぱり裏が絡んでるんですか？」
猫「裏というよりは出生だな。アズリエルは生まれつき、この能力が使えるんだ。【物を生み出す】って能力が。
コピー・複写はその流れ技みたいなもの。ただし――等価交換とい

う条件を無視できる」
セラフィス「……おぉ？　それは」
猫「質量保存の法則――を無視ってところ。その点はもはや、【魔術】ではなく【魔法】に位置する。
本当に何もない場所から、何かに手を出せる――実は神様レベル」
アリス「森羅万象の一角を支配できると？」
猫「難しい台詞知ってるな、お嬢さん。うん――人知の範疇を超えてる程度。設定した作者も実はわかってねぇ」

ドリンクバーでオリジナルＭＩＸジュース作って飲んで自爆してるＡＬＦ
「アッヒャッヒャッヒャッヒャヒャ！」
猫「すいません。今の文章書きながら、Ｍｉｘｉ日記で馬鹿なこと書いてました」
アリス「すごい、この人たち。メタな内容を書く後書きなのに、さらに上のメタを発言してる」
セラフィス「そこに痺れる！　憧れるぅ～！」

場、凍結――

エンキドゥ「さて――空気さんが滑ったところで、そろそろこちらはお開きにいたしましょうか。」
ＡＬＦ「えぇぇぇ～！」
エンキドゥ「ＡＬＦさん？　後は後ろの会場で、次のネタバレが残ってましょう？」
ＡＬＦ「……ギルガメッシュ？　エンキドゥだけ、次回登場させて良い？」
ギル「なぬ？」
ＡＬＦ「小説家いてて楽しいのはさ、『あれ？　こんなつもりなかったんだけど、このキャラ美味しいじゃん！』ってキャラがたまに

作成されちまうんだよな。時に主役さしおいて――
今回はぶっちぎりで、お前ら夫婦がワンツーフィニッシュだよ。うん、実話！
でだ、エンキドゥのキャラクターは俺の持ちキャラでも数少ない、ロリ嫁キャラ性格もよし！　謙虚謙虚！」
猫「無理やり出すのか？　作者権限で」
ギルガメシュ「む、むむむむ――」
エンキドゥ「ありがとうございますが、今回はご遠慮させていただきます。私は、王の妻ですか――」
ＡＬＦ「その謙虚さに痺れる憧れるぅ！」
猫「ネタを二重に使いすぎて、凍結る、滑る、いい加減にするぅ～
（ハリセン突っ込み！」

ルルダ「……もう勝手に閉めちゃって良いわよね？（乱闘する作者一団を見据えて」
キャス「許可。主役権限だ」
レメラ「主人公補正とも言います。皆様、このような駄文、雑文にお付き合いいただき、まことにありがとうございました」
ルルダ「ちょ！　何で貴女がしめてるの！　私は？」
キャス「無駄。もうカメラはまわっていない」
ルルダ「こ、これカメラだったの！？」

終幕

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0012d/

幻想魔蝶 異端録 -魔蝶の女-

2010年10月8日15時42分発行